

文學士箕田申之著



洋各國史

東京 株式會社普及舍





東京 教育會館 發行

中學西洋各國史

凡例

### 中學西洋各國史

#### 凡 例

- 一、本書は、中學校の上級生、又は此と同程度の學生に用ゐしむべき、教科書として編述せり。
- 二、本書の内容は、主として文部省審査の、教科細目に據れり。雖も、中等教育に於ける、各學科配合の變遷と共に、編者の實驗より得たる、私見を加へたる點、また、少からず。
- 三、本書は、學生の理解を易くし、印象を深からしめんことを主としたれば、嚴密なる意味にていふ、歴史の體に遠かれるは止むを得ざることなるべし。
- 四、國有名詞は、主として英語の發音を用ゐたり。就中、人名地名



は、漢字片假名を混用し、専ら邦人の慣用にまかせたりと雖も、其他の固有名詞は、譯語の稍一定せるものの外は、英語を用ひ、片假名にて記せり。とは、學生をして、英語の應用に便ならしめんが爲なり。

五、年表は、卷末に附して、本文の足らざるを補ひ、事件の起れる順序を明瞭ならしむ。

六、地圖系圖は、別綴として、本書の末に挿入し、覽者の爲に便に供せり。

明治三十四年十二月

編者 しろす

中西洋各國史

目次

第一篇 古代史

第一章 東方民族興隆時代

- 第一課 埃及の隆盛……………一
  - 第二課 アシリアの隆盛……………六
  - 第三課 波斯の統一……………八
  - 第四課 希臘の勃興……………一〇
- 第二章 希臘波斯衝突時代……………一六
- 第一課 波斯戰役……………一六
  - 第二課 ペリクリスの治世 希臘文物……………二〇
  - 第三課 希臘の内亂……………二三



第四課	マセドニアの強大 アレキサンダー大王……………	二七
<b>第三章 羅馬の大統一時代……………</b>		
第一課	羅馬の勃興……………	三一
第二課	羅馬の伊太利統一……………	三五
第三課	羅馬の地中海沿岸征服……………	四〇
第四課	羅馬の内亂 東方諸國……………	四二
第五課	三頭政治……………	四五
第六課	羅馬帝政の初期……………	四九
第七課	羅馬帝國の盛衰……………	五一
第八課	基督教の蔓延 帝國の分裂……………	五四
<b>第二篇 中世史……………</b>		
<b>第一章 暗黒時代……………</b>		
		五七

第一課	ゼルマン諸種の遷徙……………	五七
第二課	東羅馬と波斯……………	六二
第三課	サラセン人の勃興……………	六四
第四課	基督教會の發達 羅馬法王……………	六七
第五課	シアーレマン帝國及び其分裂……………	六九
第六課	ノルマンの横行……………	七三
<b>第二章 復活時代……………</b>		
第一課	神聖羅馬帝國 法王權の隆盛……………	七六
第二課	十字軍……………	八〇
第三課	西歐の制度及び國情……………	八五
第四課	東歐の國情 蒙古の入寇……………	八九
第五課	英佛二國の交渉……………	九三
第六課	文藝の復活……………	九六



第七課	地理上の發見……………	九八
第八課	西歐諸國の中央集權……………	一〇二
第九課	法王權の衰頹 伊太利戰爭……………	一〇五
第十課	オスマントルコの寇 東羅馬の滅亡……………	一〇八

### 第三篇 近古史

#### 第一章 宗教上の改革時代…………… 一二二

第一課	宗教改革の發端 西佛の確執……………	一二二
第二課	宗教改革の進行……………	一二三
第三課	宗教改革の普及及び其反動……………	一二九
第四課	和蘭の獨立……………	一三一
第五課	英國の宗教改革……………	一二四
第六課	佛蘭西宗派の爭……………	一二七

#### 第二章 政治上の改革時代…………… 一三〇

第七課	三十年戰役……………	一三〇
第一課	佛國の隆盛 ルイ十四世……………	一三三
第二課	英國兩度の革命……………	一三七
第三課	西國王位繼承戰役……………	一四一
第四課	歐洲諸國の東西殖民……………	一四五
第五課	露西亞の勃興……………	一四八
第六課	普魯西の勃興 奧國繼承戰役……………	一五三
第七課	七年戰役 英佛殖民地の爭……………	一五六
第八課	露國の外交及び拓殖……………	一五九
第九課	北米合衆國の獨立……………	一六三
第十課	佛國大革命の發端……………	一六六
第十一課	革命の進行 波蘭の滅亡……………	一七〇



第十二課 佛國威嚇政治 ナポレオンの出世……………一七四

第十三課 ナポレオン一世の霸業……………一七九

第十四課 歐洲獨立戰役 ヴィエナ會議……………一八三

### 第四篇 近世史

第一課 神聖同盟……………一八七

第二課 亞米利加殖民地の獨立 希臘の獨立……………一九〇

第三課 七月革命及び其影響……………一九四

第四課 英國の改革 關稅同盟……………一九七

第五課 東方問題……………二〇〇

第六課 二月革命及び其反動……………二〇二

第七課 獨伊の自由統一運動……………二〇四

第八課 クリミア戰役 亞細亞に於け英露佛……………二〇九

第九課 伊太利の統一……………二一五

第十課 北米合衆國南北戰役 メキシコの亂……………二二七

第十一課 普墮戰爭……………二三〇

第十二課 普佛戰役 獨逸の統一……………二三三

第十三課 露土戰役……………二三八

第十四課 伯林會議以後の歐洲……………二四一

第十五課 極東問題 最近事件……………二四五

第十六課 第十九世紀の進歩……………二三八

### 目次終



中學西洋各國史

文學士 箕田申之

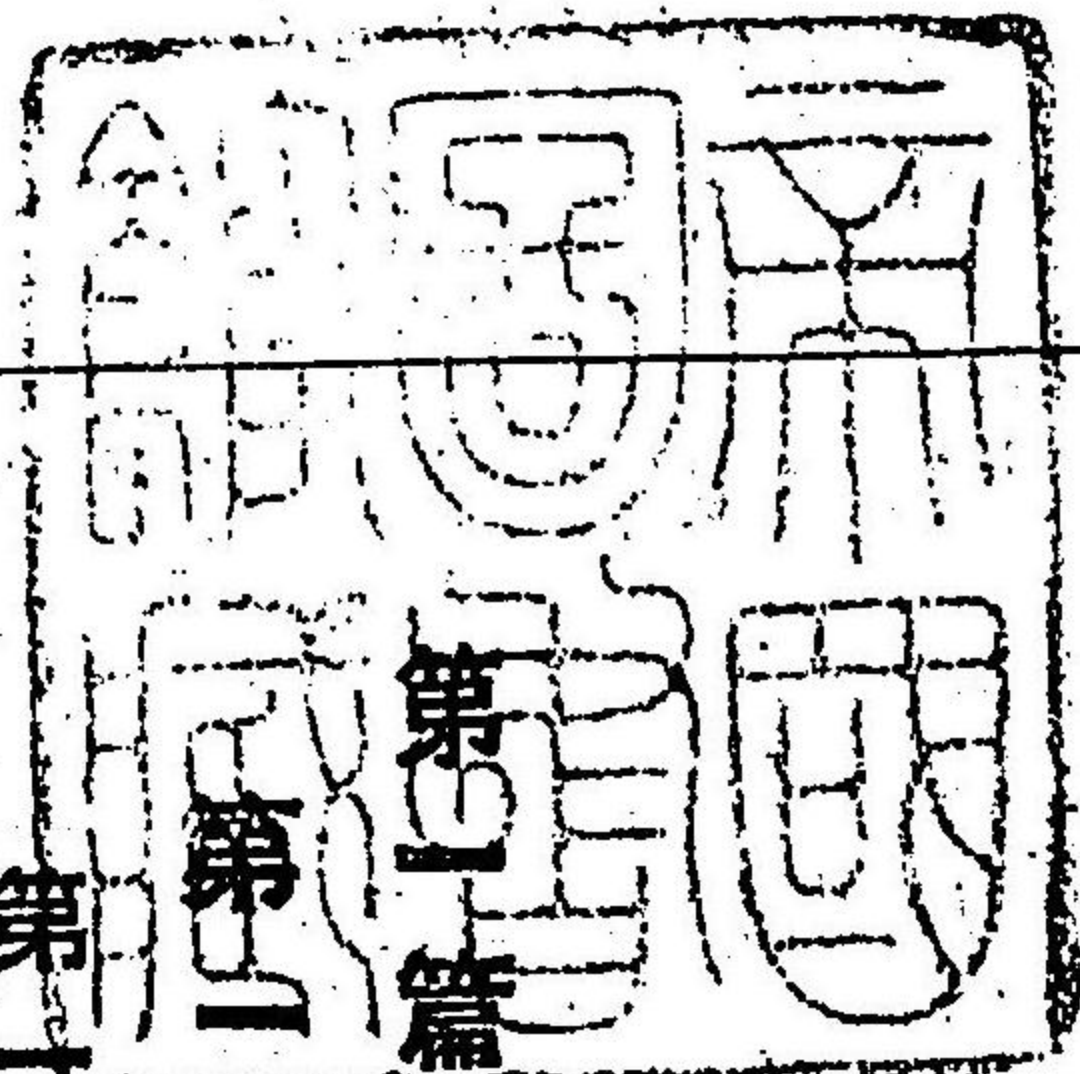
文學士 伊藤允美

共著

古代史

東方民族興隆時代

第一章 埃及 Egypt の隆盛



太古國民  
の住處

太古西洋に於て、民族の興起せる地點は、亞非利加亞細亞二大洲に跨り、ナイル河 Nile の流域より、ユーフラテス Euphrates チギリス Tigris 兩河の合流する地に至るまで、我日本帝國の凡そ四倍の面積を有し、當時の人口は、少くとも七千萬に達せるならんといふ。

埃及はナイル河の天恵に浴するが故に、最も早く開明の域

埃及の建  
國



埃及の國情

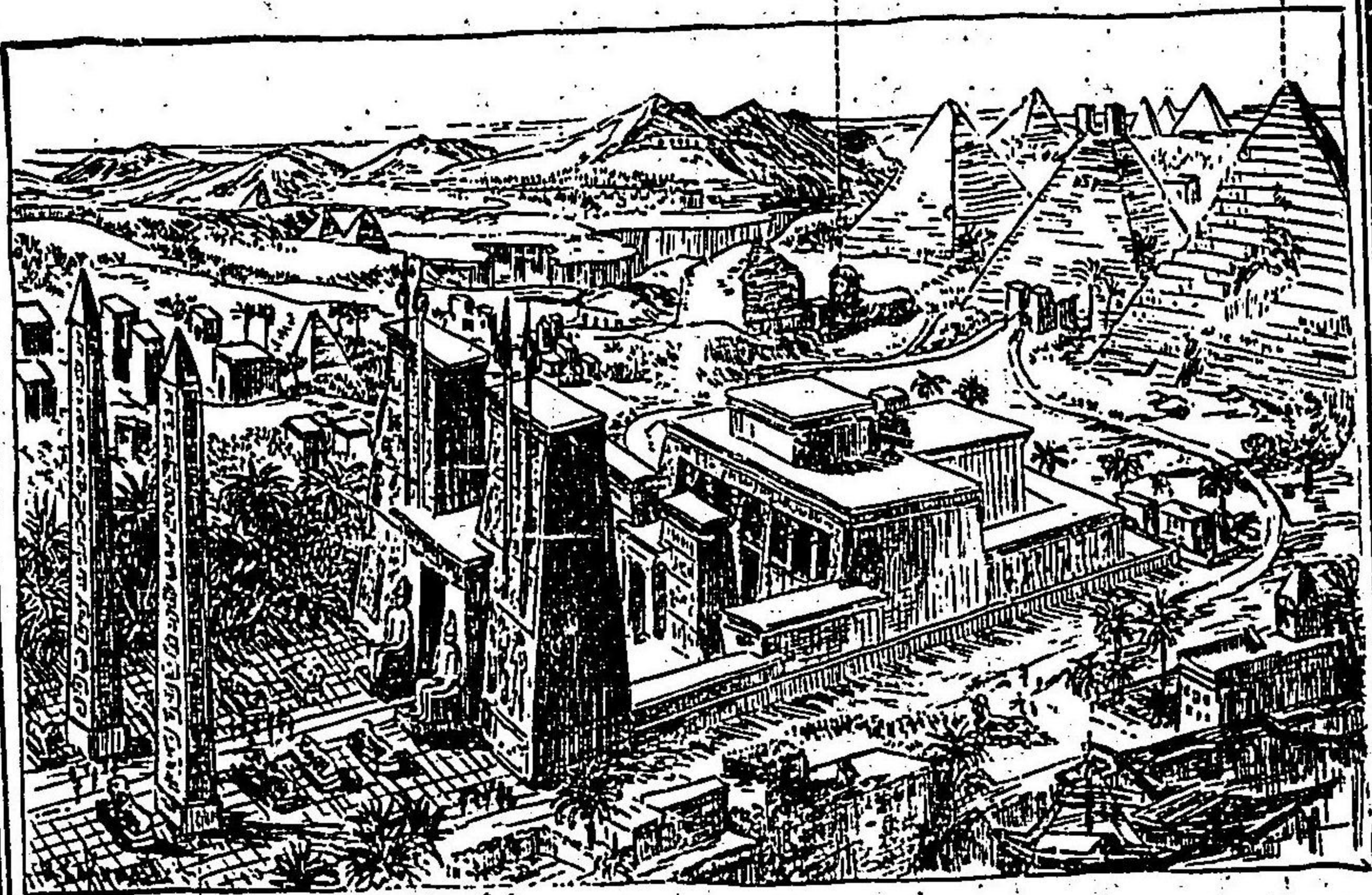
に達し、其建國は紀元前四千年頃ならんといふ。然れども、其歴史の稍信憑すべきは、第四王朝以後にして、紀元前二千五百年頃よりなり。埃及人は専ら太陽を崇拜し、又萬有を神とし拜す。人死すと雖も、靈魂は不滅なりと信じ、死體を木乃伊として保存する習慣あり。國王はフハラオ Pharaoh (太陽の子の義) と稱し、世襲にして國政を統べ、人民は僧侶、武士、平民の三階級に分れ、僧侶最も貴く、皆世襲なり。

埃及の建築

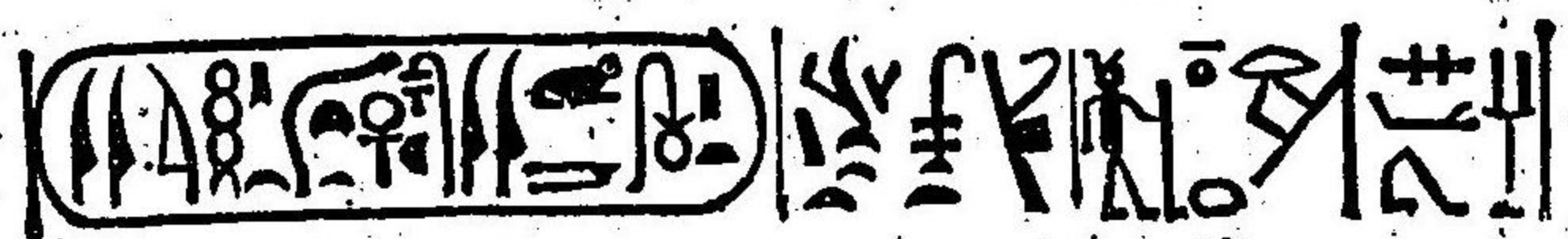
(埃及最初の王國はメンフス Memphis に都し、第四王朝の頃には、農業、工藝等大に發達し、有名なるピラミッド Pyramid 金字塔 オベリスク Obelisk 獅身女面像 Sphinx 等の大建築物は、大抵此時に成れり。此等の建築物には、多く、ヒエログリフ Hieroglyph と稱する象形文字を以て、國王の功業等を刻せり。

ヒクソス

ドゥミラビ スクンイフス



オベリスク



字

聖

紀元前二一〇〇年頃、シリア Syria 地方に住せし遊牧の蠻人、南侵して埃及を征服し、其諸王をヒクソス Hyksos と稱せり。紀元前一六五〇年頃に至り、舊王族セーベス Thebes に起り、ヒクソ



埃及新王國

スを倒して、新王國を建てたり。其諸王シリヤを服し、メソポ  
タミア Mesopotamia 地方を壓して、大に版圖を擴め、殆ど二百  
年、の威を西南亞細亞に振ひしかば、ヘブリー人 Hebrews  
フェニシア人 Phoenicians は其保護のもとに發達せり。

ヘブリー  
人の

ヘブリー人は、もとメソポタミアより、パレスティン Palestine  
に移住せる人民なり。牧畜を業とし、一神教を奉じて、當時、西  
南亞細亞に行はれたる多神教に反對せしかば、常に近傍の  
人民に迫害されたり。埃及の新王國起るに及び、其王に請ひ  
て、難をゴーシン Goshen に避け、大に繁殖せり。埃及の國勢衰  
へ、スエズ Suez 以外の地を失ふに及び、ヘブリー人は、其酷使  
に堪えず、紀元前一三二〇年頃、モセス Moses に導かれて、其  
故地パレスティンに還り、國を建て、一神教を確立し、故らに  
王を戴かず、祭政一致の政體を執れり。然るに、國民の統一、鞏

ヘブリー  
人の建國

ヘブリー  
人の分裂

固ならず、外患頻りに到りしかば、紀元前一〇五五年、始めて  
ソウル Saul を立てて王とせり。第二代の王ダヴイド David 勇  
敢にして能く戦ひ、大に版圖を擴め、都をゼルサレム Jerusa-  
lem に奠め、其子ソロモン Solomon 大に商業を獎勵して、富強  
を致せしが、其死後、内亂起りて、イスラエル Israel ジデア Judea  
の二國に分裂せり。(前九五三年)

フェニシ  
アの國情

フェニシア人は、レバノン山 Lebanon と地中海との間に在る狹  
地に住し、其國、市府の聯合より成り、航海に長じ、通商貿易を  
國是となし、陸には隊商を組み、メソポタミアより印度地  
方に到り、海には埃及の保護を得て、地中海を航行し、遠く今  
の英吉利、和蘭地方に達し、沿岸に數多の殖民地を開き、其亞  
非利加に設けしカーセージ Carthage の如きは、後來大に繁  
盛に趣けり。



フニシア人は古代民族の交通を助長せしのみならず、發音を代表する文字を發明して、歐洲諸國の文字の源泉となりしが、先きには埃及、後にはアッシリアの興隆せる爲め、政治上には強盛となること能はざりき。

### 第二課 アッシリア Assyria の隆盛

ユーフラテス・チグリス兩河の灌漑する沃野には、紀元前一九〇〇年頃、カルデア Chaldaea 王國(又た前バビロニアともいふ)を稱せしが、紀元前第十三世紀の中葉、其屬國なるアッシリアの爲に滅ぼされたり。

アッシリア人はカルデア人と同種族にして、專制の王を戴き、勇敢にして戦を好み、又天文・建築に長じ、楔形の文字を用ゐたり。其宗教は太陽及軍神を崇拜する多神教にして、其風西

アッシリアの國情

カルデア

アッシリアの大版圖

南亞細亞に彌漫し、此をバール教 Baal とす。

アッシリアの勢力は紀元前第八、第七世紀に至りて大に増長し、悉くシリア・フニシア・イスラエル・ジュデア・埃及等を征服し、空前の大國を建設せしが、其王は自ら國都ニニフ Nineve に住して王の王と稱し、屬邦には各舊王を戴きて自ら治めしめ、只歳貢を徴し、バール教信仰を命じ、少許の守備兵を派遣駐在せしめしのみなれば、其版圖の統一連絡は充分ならず、屬邦は常に離叛せんとせり。

されば紀元前第七世紀の中葉、シシア人 Scythia 北方より入りて、東はメデア Media 西はリヂマ Lydia を侵すや、會、バビロニア Babylonia の叛するあり、國內紛擾を極めしかば、メデアリア人は各自シシア人を撃攘して、アッシリアより獨立し、更にメデア王シアクサレンス Cyaxares は、バビロニア王ナボポラ



アッシリア滅亡

サー Nabopolassar と結び、紀元前六〇六年、ニニアを陥れてアッシリアを滅ぼし、埃及も間に乘じて獨立し、他の小邦皆之に倣へり。

四國對立

此に於てアッシリアの故地に、メデア・バビロニア・リヂア及び埃及の四大國對立し、互に覇を争ひ、バビロニアは先づ埃及を退け、フニシア・ジヂアの連合軍を敗り、次て之を滅ぼし、大に土工を起し商業を奨励して、他の三國を壓倒する勢ありしが、突然波斯國 Persia の勃興するありて悉く其併吞する處となれり。

### 第三課 波斯の統一

波斯の國情

波斯は、もとメデアの屬地にして、其人民は勤儉勇武なり。其固有の宗教をゾロアスター教 Zoroastrianism とし、宇宙の事は

サイラス

總て善惡二種の神の主る處にして、人間の善惡禍福は、其争鬪の結果に外ならずとせり。

(紀元前第六世紀の初め、其勢、本國を凌ぐに至り、王サイラス Cyrus 紀元前五五〇年、遂にメデアを滅ぼし、更に進みてカウカサス山地方 Caucasus を攻略せり。此に於てリヂアはバビロニア、埃及と同盟し、小亞細亞海岸の希臘殖民地に援を求め、以て波斯に當らんとす。サイラス即ち先づリヂアを攻めて之を滅ぼし(前五四六年)、海岸の地を服せめし、還てバビロニアを滅ぼし(前五三八年)、更に大に東方を征服せり。

カムビセス

サイラスの子カムビセス Cambyses 立ち、埃及を征して之を滅ぼし(前五二五年)、次てシリア地方を略せり。其死後國內一時亂れしが、王族ダライアス Darius 難を駈めて王位に即き、前主の地を恢復し、更に北方蠻族の侵入を防がんが爲め、東は

ダライアスの大統



ダライアスの内治

城砦障壁を築き、西は蠻族を追ひて遠く歐洲の東南に入り、其版圖の大なること、アッシリアの盛時に越へ、國家の強盛其極に達せり。  
 ダライアスは前代の五解に鑑み、其大版圖の連絡統一を完からしめんが爲め、スーサ Susa パーセポリス Persepolis の二大都を經營し、王權を無限にし、常備軍を置きて中央政府を鞏固にし、國內を二十縣に分ち、各縣に知事將軍を常任して、其地方の政務軍務に當らしめ、監察使を置きて非違を檢せしむ。又貨幣驛傳の制を定め、軍路運河を開きて、商工に便し、緩急に應せしむ。而して風俗宗教は専ら各地方の舊慣に依らしめたり。

#### 第四課 希臘 Greece の勃興

希臘人

東方に於て太古の國民が興亡せる際、歐洲の東南に位せる一半島に、優等なる國民勃興し、文化の完全なる發達をなせり。これ即ち希臘人にして、自ら稱してヘレネ人 Hellenes といひ、エオリア Aeolia・ドリリア Doria 及びアイオニア Ionia の三種に分る。

希臘の國情

希臘は國內山岳起伏して天然の國境をなせる爲め、自ら小邦割據の風を致し、政治上の統一を欠きしが、沿岸港灣に富み近海島嶼多くして、自ら交通の便を有し、氣候溫和、風光明媚なるを以て、其人民はよく優美活潑なる特質を養成し、夙に東方諸國の文化を輸入同化することを得、其宗教言語習慣の同一なるは、よく同國民たる觀念を失はしめず、殊に其宗教はゼウス Zeus (天の神) を主神としたる多神教にして、神を敬愛する念深き爲め、アムフクシニー會 Amphictiony オリム



オリムピア祭

ピア祭競技會 Olympiad 等の會合あり。全國民競ふて此に集まり、共同を誓ひ、文武の技を闘はして互に親睦融和し、第一回オリムピア祭を行ひたる紀元前七七六年を以て其紀元となせり。

希臘の古史

希臘の古史は詳ならず。ホーマー Homer の詩篇によるに、早くより許多の小王國に分れ、政兵の權を并有せる世襲の王を戴き、元老ありて之を補佐し、公民の集會ありて政を議したるものの如し。

ドリリア人の移轉

紀元前一〇〇〇年頃、北方に住せしドリリア人南侵してペロポネサス半島 Peloponnesus に入り、ラコニカ Laconica 以下數國を建てしかば、其地に住せしエオリア人の一部は逃れて半島北岸のアイオニア人を驅逐し、アケイア Achaia 以下數國を建つ、アイオニア人、即ち中部希臘及び東方の群島に逃れ

スバルタ  
ライカガス憲法

て、アチカ Alica 以下數國を建てたり。此大移動後、希臘の人口大に増殖せしかば、競ふて小亞細亞の沿岸より黒海、地中海の沿岸等、到る處に殖民地を設けたり。又此地より諸邦は概ね王政を廢して貴族政治となりしが、先づ頭角を表はせるものを、ラコニカの首府スバルタ Sparta 及びアチカの首府アゼン Athen となす。

スバルタの市民は悉くドリリア人にして、多數の降服者なる平民を壓せんが爲め、紀元前第九世紀頃ライカガス Lyica curgus の制定せしといふ憲法によりて大に尙武の風を養へり。即ち政府は市民の教育、結婚に干涉し、男兒の羸弱なるものは下して平民となし、強健なるものは七歳に至れば公設の寄宿所に入れ、嚴格なる規律のもとに武技を教へ、質朴剛毅、忍耐、愛國等の諸徳を養成せしめ、女子も體育と婦徳の



涵養とを怠ることなからしめ。又、市民は悉く公堂に會して飲食を共にし、濫りに市外に出でて他邦の風に感染することなからしめたり。

スバルタの貴族主義

參政權は市民の專有する處にして、上に二人の王あれども權力弱く、實權は却て其下にある五人の監督官エプフール Ephor にあり。かくてスバルタは専ら貴族政治を理想とし、漸次近隣諸邦を壓服し、覇をペロポソネサス半島に稱せり。

アゼン

執政

アゼンは初め王政なりしが後之を廢し、アルコン Archon 九

ソロンの憲法

人を置きて政務に當らしむ。然るに貴族と平民との軋轢甚だしかりしかば、紀元前五九四年、ソロン Solon 憲法を制定し、貸借の法を改めて貧民を救ひ、財産の多寡に従ひて人民を四級に分ち、各級の權利義務を定めたり。此新法は尙ほ平民を満足せしむること能はず、ピシストラ

タイラン

僭主

タス Pisistratus といふもの機に乗じて政權を握り、タイラン Tyrant となること十年、ソロンの憲法を襲用し、海軍を起

オストラシズム

し、商業を盛んにして、アゼンの富強を謀れり。其死後、騷亂又起り紀元前五〇九年、クリスセネス Clisthenes 權を得て、ソロンの憲法を脩正し、抽籤によりて議會の議員を選出し、又オストラシズム Ostracism と稱する秘密投票法を設けて、タイ

アゼン民主主義

ラントの輩出を防ぎたり。貴族黨はスバルタの兵を誘ひて、クリスセネスを倒さんとせしが、却て民主黨の制する所となり、アゼンの民主政治はこれより確立し、中部希臘に雄視するに至れり。



## 第二章 希臘波斯衝突時代

### 第一課 波斯戰役

希臘諸邦の漸く盛大となり、其自主獨立の精神を發揮せんとする時は、恰も波斯王ダライアスが其專制的大統一主義を以て東方諸國を併吞せる時にして、小亞細亞に於ける希臘殖民地も、其征服する所となれり。

紀元前五〇〇年、アイオニア殖民諸市、叛を企て、アゼンは軍艦を派して之を援く、ダライアス大兵を發して之を討平せしが、深く希臘殊にアゼンの反抗を惡み、誓て之を膺懲せんことを期せり。此に於てか東西最初の衝突起る。

ダライアスは、紀元前四九二年、第一回の遠征軍を出だししが、海軍は颶風に遇ひて歸り、陸軍は途に敗れしかば、紀元前四九〇年、再び大軍を發して、アチカに侵入せしむ、アゼンの

アイオニア叛亂

波斯の第一回遠征  
第二回遠征

マラソンの戦

希臘の波斯に期する準備

第三回遠征

名將ミルチアデス *Miltiades* 之をマラソン *Marathon* の野に迎へ撃て大勝を得たり。ダライアス次で戦死し、其子サークセス *Xerxes* 後ち、父の遺志を繼ぎて大に再征の準備を爲せり。されば希臘は國情恟々として靜まらず、アゼンに於ては、セミストクリス *Themistocles* は海軍を強盛にして之に當らんとし、アリストタイデス *Aristides* は重きを陸軍に置かんとし、議、兩派に分れしが、アリストタイデスは遂にオストラコンズムによりて國外に逐はれたり。セミストクリス更に主張して、コリンス *Corinth* に列國會議を開きて防禦の策を講じ、スパルタを推して盟主となす。

紀元前四八〇年、波斯王サークセス親ら陸軍を率ゐ、水陸並び進みて希臘に侵入す。コリンス會議の結果先づスパルタはレオニダス *Leonidas* をして之を防がしむ。レオニダス寡



サーモピ  
レの戦



兵を以てサーモピレの Thermopylae の險を扼し、よく大敵を防  
 ぎ心か遂に力竭きて全軍を戦歿し。波斯軍はア  
 カに入りてアゼシを燒盡せり。此より先き希臘海軍を鼓舞  
 臘の海軍は悉くサラミス灣 Salamis に集まり、波斯海軍従て  
 之を包圍せり。セミストクリス奇計を以て希臘海軍を鼓舞

サラミス  
ノ戦

ロアス同  
盟

し、遂に波斯海軍をサラミス灣頭に迎へ大に之を破る。ザ  
 クセス其後方を絶たれんを恐れ、陸兵を其將に委して倉皇  
 本國に逃れ歸れり。翌年希臘の陸軍は、波斯の殘兵をプラテ  
 ア Plataea に破り、海軍はミガリー Mycale に大捷を得たり。  
 其後アゼンはスパルタの因循なるに乗じ、アイオニア諸市  
 を合縦してデロス同盟 Delos を組織し、自ら其盟主となり  
 て、同盟軍用金の監督及び軍艦使用の權を握り、紀元前四六  
 五年には、其將シモン Cymon 同盟艦隊を率ゐて、波斯の陸海  
 軍をユーリメドン Eurymedon に鏖殺し、海上の覇權を握りし  
 かば、アゼンの武威は地中海に振へり。  
 波斯はザークセスの後、内訌相繼ぎ、埃及の叛亂ありて大に  
 疲弊せしかば、紀元前四四九年、小亞細亞なる希臘殖民地の  
 獨立を確認して、アゼンと和せり。此頃デロス同盟諸市は、漸



ペリクリ

文藝

クアゼンの専權を惡むの念を生じ、スパルタも其隆盛を忌み、私に波斯と通じて之を苦めんとし、戦を開きしが、紀元前四四五年、諸國間に三十年間の休戦を約せり。

第二課 ペリクリスの治世 希臘の文物

波斯戰爭に偉勳を奏したるアゼンは、ペリクリス Pericles の指導のもとに其極盛に達せり。ペリクリスはクリスセネスの姪にして、民主黨の主領なり。政府の組織を改めて、完全なる民主的共和國となし、アゼン市民に公有地の分配、海軍服役の報酬、自由觀劇等の諸權を與へ、益海軍を擴張し、ピレウス Piraeus の長城を築きて、アゼン市不虞の變に備へ、デロス同盟の金庫をデロス島よりアゼンに移し、其金を以て文學技藝を獎勵せしかば、希臘一代の文物燦然とて起り。

哲學

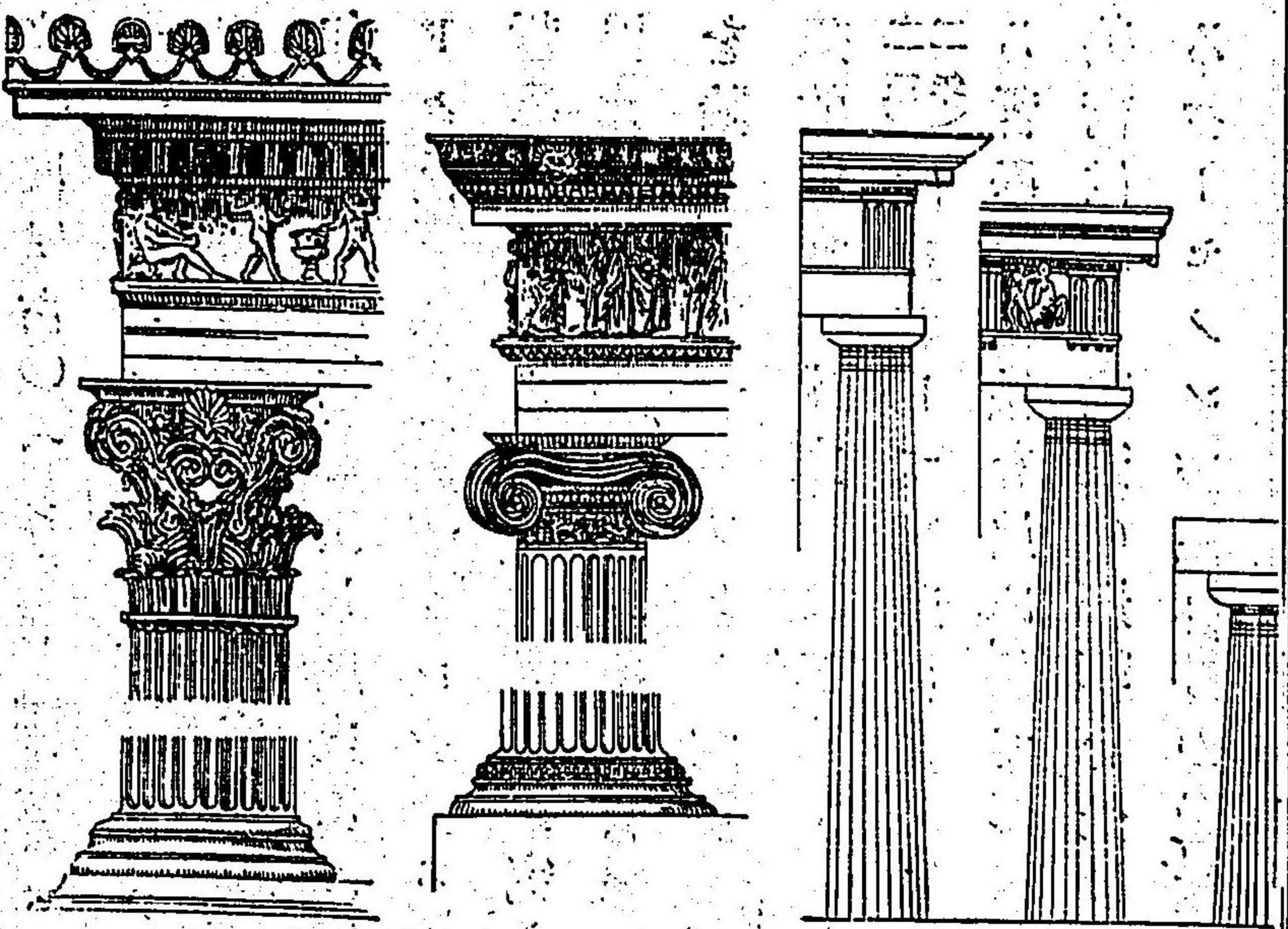
工藝

文學には、古のヘシオド Hesiod、ピンダル Pindar 等の詩體より一轉して、エスキラス Aeschylus、ソポクレンス Sophocles、エーリピデス Euripides 等の悲劇詩家、及びアリストフネス Aristophanes の如き喜劇詩家を出し、歴史には、歴史の父と稱せらるるヘロドタス Herodotus、次でツシデデス Thucydides、出で史論を以て鳴る。

哲學は、早くより諸大家其研究を怠らざりしが、ソクラテス Socrates (前四六九年、同三九九年) 出でて専ら形而上の事を究め、智徳の關係を論じ、其弟子プラトー Plato (前四二九年、同三四七年) は靈魂不滅及び理想的社會の成立を論じ、次でアリストトール Aristotle (前三八二年、同三二二年) は主として實驗により、論理の法を基礎として、系統ある哲學の組織を勉め、兼て形而下の學術をも研究せり。

美術は、専ら建築の影響を受けて發達し、當時の建築に成れるパーセノン Parthenon の殿堂は、壯嚴なるドリア式の粹を





柱の式ドーリス

柱の式イオニア

柱の式コリント

拔き、エレクセアス Electrum の殿堂は、優麗なるアイオニア式の美を集め、次て裝飾巧緻を盡せるコリント式の建築も起り、此に附帶せる彫刻繪畫の如きも、眞と美とを兼ね備ふるに至り、フヂアス Phidias の彫刻の如き古今獨歩と稱せらる。ペリクリス十年の執政の間は、希臘の最盛時代

にして、外面頗る平和の觀を呈せりと雖も、其理想とする所は、アゼンを中心として、希臘を統一せんとするにありしかば、スパルタは嫉妬の念止み難く、百方其防害を試み、遂に大破裂を生ずるに至れり。

### 第三課 希臘の内亂

コリントスと其殖民地との間に争を生ずるや、アゼンは干渉せしかば、スパルタは其同盟を誘ひて、コリントスを救はんとし、紀元前四三一年、遂にアゼン、スパルタ及び其同盟の間に、二十七年に跨る内亂を生ぜり。此をペロポネネサス戰役 Peloponnesian war とす。ペリクリスは其陸軍の到底敵せざるを知り、専ら海軍に依頼して敵を奔命に疲れしめんとせしが、會アゼンに疫病流

ペロポネネサス戰役の初期



行し、ペリクリスも紀元前四二九年、病歿して、アゼンの勢少しく衰へたり。然れども其海軍よくスパルタの鋒を挫き、十年間の戦争を續けしが、諸邦悉く戦に倦みて、紀元前四二一年五十年間の休戦條約を結べり。

時にアゼンは輕佻なるアルシビアデス Alcibiades の獻策を納れ、紀元前四一五年、シシリ島 Sicily Cyrus を征して敗れ、全軍覆歿せり。然るにアルシビアデスは途より逃れて波斯に走り、其王に勸めて軍資をスパルタに給し、海軍を以て之を救はしめしかば、希臘諸邦の戦争又起り、アゼンは民主黨互に争ひて統一の策行はれず、連戦利を失ひ、其海軍さへ波斯の海軍の爲に粉碎されしかば、紀元前四〇四年、スパルタの同盟軍はアゼン市を圍みて之を陥れ、悉く其武庫船具を毀ち、スパルタの監督の下に、三十人の貴族を以て寡人政府を

シシリ  
征伐

波斯の干  
渉

アゼンの  
衰微

立て、アゼンは一時自由を失ひ、ペロポネサス戦役は終局を告げたり。

スパルタ  
の覇權

此よりスパルタは希臘の覇權を握り、到る處に貴族を助けて、民主政治の撲滅を勉め、專權日に甚し、アゼンは、其後三十僭主の暴を惡み、兵を擧げて之を逐ひ、民主政を恢復せしも、

希臘の波  
斯侵入

人心浮華に流れて、昔日の威力を再びすること能はず。波斯にては、王弟サイラス Cyrus 私にスパルタに通じ、希臘の傭兵の助を得て、王位を奪はんことを謀り、事成らずして戦死す。スパルタは此亂に乗じて爲す所あらんとし、紀元前

三九六年女王アゲシラウス Agesilaus をして、波斯に侵入せしむ。波斯は之を防ぐこと能はず、財を散じてアゼン・コリンス・セーベス Thebes 等の諸邦を誘ひ、スパルタを討たしむ。諸邦も亦久しくスパルタの專横を惡めるを以て、コリンスを

コリンス  
戦役



盟主としてスバルタと戦ふ。然るにスバルタは紀元前三八七年、漫りに小亞細亞海岸の殖民地を波斯に與へて之と和し、希臘諸邦の同盟を禁じ、諸邦を孤立せしめて己れ威を振はんとせり。

セーベスの勃興

レウクトラの戦

希臘の衰微

セーベスに於てはスバルタの陰謀功を奏し、貴族黨一時勢力を得しが、エパミノンダス Eparinondus、ペロピダス Peropidus 等の志士相謀りて、貴族政治を顛覆し、諸市を聯合して其盟主となり、紀元前三七一年、レウクトラ Leuctra の野に戦て大にスバルタ軍を破り、更に進みてペロポシネサスを蹂躪せしかば、スバルタの威力頓に衰へしが、エパミノンダスの戦歿するに及びセーベス復た振はず。希臘諸邦はアゼン先づ衰へ、スバルタ亦疲弊し、セーベスは覇業未だ半ばにして成らず、波斯も内亂相續ぎて國勢振は

ず、此時に當りてマセドニア Macedonia 北方に勃興し、遂に覇業を爲せり。

第四課 マセドニアの強大 アレクサン

ダー大王

マセドニアは其文化の發達遅かりしを以て、希臘諸邦よりは常に野蠻視されしが、フロリッパ Philip 王位に即くや、頻りに希臘の文化を輸入し、兵制を革め、スレースの沿岸を略し、フィシス人 Phocis を討じて、デルフィー Delphi の神領を恢復し、功を以てアムフクシオニー會に加入することを得、頻りに諸邦の内事に干渉せんとす、アゼンの辨士デモスセンス Demosthenes 其野心を看破し、諸邦に説きて大同盟を組織せしが、フロリッパは紀元前三三八年、其聯合軍をカイロネイア Chaeroneia の戦



アレクサ  
ンダーの  
波斯征討

アレクサ  
ンダーの  
雄圖

Phoeniciaに破りて、希臘の盟主となり、將に波斯を征せんとせしが、刺客の爲に殺されたり。

諸邦は直ちに獨立を謀りしが、フリュギアの嗣子アレクサンダー Alexander 天資の雄才あり、悉く諸邦を服して希臘の元帥となり、紀元前三三四年、自ら兵を率ゐて波斯に入り、其王ダライアス Darius 三世をイサス Issus に破り、小亞細亞・シリアを席卷し、進みて埃及を平げ、アレクサンドリア府 Alexandria を創建し、更に鋒を轉じて東に向ひ、ダライアス三世の大軍とチグリズ河畔のガウガメラ Gaugamela に激戦して之を破り、ダライアスは逃れて其臣下に弑さる。此に於て波斯は全くアレクサンダー大王の有に歸せり。

アレクサンダーは、初めは只た希臘の國敵波斯を討ちて、其權力を固定せんとするに過ぎざりしが、今や新に大統一の

アレクサ  
ンダー王  
國の分裂



アレキサンダー大王の像

理想を生じ、更に進みて印度河邊を攻略せしが、將士の歸志生ぜしを見て、一旦バビロン府に歸り、自らダライアスの女を娶り、將士に命じて波斯の女子と婚せしめ、勉めて東方の風俗習慣を採用し、希臘の文化を東方に輸入し、以て東西領土の人種文化を融合せんとせしが、紀元前三二三

年、病で歿し、其經營遂に全く成るに及ばずして終はれり。

アレクサンダーの歿後、此に代るべき大英雄なく、其諸將互に相争ふこと二十年、遂にシリア・マセドニア及び埃及の三大國と、スレース Thrace、ヘルガモン Pergamon、ポニマス Pontus、アルメニア Armenia、ローダス Rhodus 等の數國に分裂したりき。



シリア

シリアはセリーカス *Seleucus* の據る處にして、西南亞細亞一帯の地を占め、其國都アンチオク *Antioch* は東西交通の衝に當り、國勢盛なること六七十年なりしが、バクトリア *Bactria*、パルチア *Parthia* の二國先づ獨立してより、大に衰へたり。

埃及

埃及はトレミー *Ptolemy* の手に歸し、其子孫相繼ぎて王となり、商業を盛にし、文學美術を獎勵せしかば、希臘の學者は多く逃れ來りて學術の研究に従事し、其都府アレクサンドリアは東西商業の中心たるのみならず、又文藝の中心となり、ユークリッド *Euclid* の幾何學、トレミーの地理學等皆此地に出でたり。

マセドニア

マセドニアはカッサンダー *Cassander* 之を領し、希臘諸邦の叛亂を鎮めて、其覇權を握りしが、後ちアケイア同盟 *Achaia* 及

びエトリア同盟 *Aetolia* 起りて、殆ど獨立の姿をなし、本國にては内亂起りて屢王位を代へ、紀元前三八七年、エピルス *Epirus* 王ピラス *Pyrrhus* 勢を得、マセドニアに入りて、王となりしが、在位僅に七ヶ月にして逐はれしを以て、更に志を西に伸ばさんとし、遂に羅馬と交通を開くに至れり。

### 第三章 羅馬の大統一時代

#### 第一課 羅馬 *Rome* の勃興

羅馬人の特性

紀元前第四・第三世紀に跨り、伊太利半島に於て新に有力なる國民の勃興せるあり、此を羅馬人となす。羅馬人は希臘人の如く文藝に優れずと雖も、政治上の手腕は大に之に勝れ、遂に空前の大統一を爲すに至れり。蓋し羅馬人の起るや、其



希臘殖民地

周圍は既に開明なる人種の占領する處となり、其生存競争の必要上より、斯くなりしものなれば、先づ當時諸人種の關係より述べざるべからず。

カーセー

既に述べたる如く、フェニシア人希臘人は共に廣く殖民地を設け、伊太利南部及びシシリー島の東部には希臘の殖民地あり、亞非利加の北岸及びシシリー島の西部にはフェニシアの殖民地あり、就中亞非利加のカーセージ Carthage は最も形勝の地を占め、其本國の衰へしにも拘はらず、東西に通商して益富強を加へ、其海軍は優に地中海の海上權を制する力ありて、常に希臘の殖民諸市を威壓せんと勉めたり。

エトラスカントラネ  
伊太利民族

伊太利の北部にはエトラスカン人 Etruscan あり、製造商業に従事して、稍繁榮の狀を呈せり。中部は即ち伊太利民族の住せる處にして、拉丁 Latin・サバイン Sabine・サムナイト Sam-

羅馬王政

nile、及びウムブリ Umbri の四種に分れ、各村落に住して、當時は未開の狀況にありき。

羅馬共和政成る

羅馬の古史も明ならざれども、其初め拉丁人の一部がサバイン人及びエトラスカン人の二部落と合して一市をなし、此を羅馬と呼べるに起りしもの如く、上に選舉せる王を戴き、パトリシアン Patrician より成れる元老院 Senate 及びコムミチア、キリアタ Comitia Curiata ありて之を輔佐し、プレビアン Plebian は全く參政權を有せざりしかば、王は遂に其請を容れて新にコムミチア、センチュリアタ Comitia Centuriata を組織し、プレビアンにも參政權を與へしに、パトリシアン之を悦ばず、遂に王を逐ひて共和政治を立て、コンサル Con-sul二人を置き、任期を一年としてコムミチア、センチュリアタより選出し、元老院以下をして之を輔けしめ、國家危急の際に



十二銅表  
の法律

ゴール人  
の侵入

は特にデクテーター Dictator を置き、其任期を六ヶ月とし、之に文武の大權を一任することとなせり(紀元前五〇八年)。此改革以後、實權は却て元老院に歸し、加ふるに内憂外患交、臻り、平民は常に兵役に服して貧困を極め、遂には奴隸の境遇に陥るもの多かりしかば、貴族に迫り、トリビーン Tribune を設けて自己の權利を保護せしめ、コミチア、トリビーンタ Coimilia Tributa を組織してコミチア、センチュリアタの權を分たしめ、次で成文律の編纂を求め、紀元前四五〇年、有名なる十二銅表の法律 Law of Twelve Tables を編纂せり。

然るに、紀元前三九〇年、北方アルプス山麓に住せるゴール人 Celtae 羅馬に侵入し、都市を焼き掠奪を恣にする、羅馬は重幣を納れて僅に之を退くることを得しが、平民の困厄殊に甚しかりしかば、時のトリビーン、リシニアス Licinius は負債償

リシニア  
ス法

伊太利中  
部の征服

人民の階  
級

却の法、公田私用の制等を設けて之を救はんとし、紛争十年を経、紀元三六七年、漸く此を法律とすることを得、爾後平民も各種の官職に就くことを得て、多年の紛争局を結び、羅馬は共力外敵に當ることとなれり。

### 第二課 羅馬の伊太利統一

羅馬は内に貴族と平民との争あるにも拘はらず、絶へず近隣の諸族と戦ひて隆盛に赴き、紀元前三四九年には、悉くゴール人を撃攘し、紀元前二八二年には、數回の戦争の後、サムナイト人、ラテン人の聯合軍を破りて其地を併せ、北はポイ河 Po より、南は希臘殖民地に至る迄、悉く羅馬の版圖に入れり。

羅馬市民は即ち自ら宣戦媾和通使、及び貨幣鑄造の三大權



を握り、拉丁人及び他の伊太利人には各自治を許して、其大權の下に結合せしめ、拉丁人には功により市民権を得しむ。斯くして羅馬は領土の離畔を防ぎ、更に其銳鋒を南方に轉ぜんとす。

ピラスの寇

希臘殖民地の人民、大に恐れ、タレントム Tarentum より援を本國なるエピルス王ピラスに求む、ピラス直ちに之に應じ、伊太利に上陸して、頻りに羅馬軍を破りしかば、伊太利の諸種族之に従ふもの多し。然れども拉丁人はよく羅馬に忠實にして、且つ羅馬人頑強に抗敵せしかば、ピラスも多く兵を失ひ奔命に疲れたり。會、シシリ島のシラキース市 Syracuse カーセージの爲に苦められ、救をピラスに求めしかば、ピラス乃ち轉じてシシリに至り、大にカーセージ軍を破る。此に於て、カーセージと羅馬とは攻守同盟を結び、ピラスの再

第一ピニク戦役

プロウニス

び伊太利に上陸するや、海陸より攻めて大に之を破り、ピラスは遂に志を得ずして國に歸り、伊太利の希臘殖民地は悉く羅馬の有となれり。羅馬は常にカーセージの地中海に雄飛するを忌む、其同盟も、もとより本意に非ず、故にエピルスの寇止むや、二國の衝突は直ちにシシリに於て生じ、紀元前二六四年、第一ピニク戦役 Punic War 起る。

此役の初め、カーセージの海軍はよく海上を制して、精銳なる羅馬の陸軍も更に其用を爲さざりしが、羅馬は難破せる敵艦に摸して戦艦を作り、漸次強大なる海軍を編制して、紀元前二四一年、遂にカーセージの艦隊を全滅し、シシリ及び償金を收めて和を講ぜり。

羅馬は其新領地を以てプロウニス Province となし、羅馬の



法律の下に自治を許し、官吏を派して之を管理せしむ。次でカーセージに迫りて、サルヂニア Sardinia 島を割かしめ、北の方ゴールを討ちて其地を略し、悉く之をプロヴィンスとなせり。

カーセージは、新富源を得て羅馬に復仇せんとし、其豪族ハミルカー Hamilkar といふもの、西班牙半島に入りて土民を服し、地を拓き兵を養へり。羅馬大に之を忌み、紀元前二一八年、第二ピニク戦役起る。

ハミルカーの子ハンニバル Hannibal よく兵を用ひ、西班牙半島より進み、アルプス山の嶮を越えて北部伊太利に出で、連りに羅馬の兵を破り、シリア・マセドニア・ゴール及びシリヤ等皆ハンニバルに應ず。羅馬は埃及と同盟してシリヤを制せしめ、兵を分つてマセドニア以下を防ぎしも、ハンニ

第二ピニク戦役

ハンニバル

ザマの戦

バルの鋭鋒當るべからず、殆ど危急に瀕せり。羅馬は乃ち最後の勇氣を鼓して、一方には成るべく戦を避け、ハンニバルをして奔命に疲れしめ、一方には名將シビオ Scipio を西班牙に遣はし、ハンニバルとの連絡を絶たしむ。

シビオは西班牙を平げて、直ちにカーセージを衝きしかば、カーセージは大に驚き、ハンニバルを召還し、紀元前二〇二年、兩軍ザマ Zama に激戦し、ハンニバル大に敗れたり。此に於てカーセージ力屈して和を乞ひ、西班牙を割き、軍艦を毀ち、償金を納れ、及び羅馬の許可なくして猥りに兵を動かさざることを約せり。

羅馬は此より先き希臘諸州を勸めて、共にマセドニアを討ち、其王フィリップ三世 Philip III をして和を乞はしめしが、茲に至りて伊太利及びシシリーの叛者を罰し、戦役の傷痕を回



復することを勉めたり。

### 第三課 羅馬の地中海沿岸征服

マセドニア  
ア征伐

紀元前二〇〇年、マセドニア王フィリップ三世は私にシリア王安チオカス三世 Antiochus と結び、埃及を平げて先きの損失を償はんとせしかば、埃及は援を羅馬に乞へり。羅馬乃ち希臘諸邦の兵を合せ、マセドニアを討ちて大に之を破る。フィリップ止むを得ず和を請ひ、償金を納れ、羅馬の許可なくして兵を動かさざることを約せり(前一九七年)。アンチオカスは一旦希臘に上陸せしが、羅馬軍の爲に逐はれ、小亞細亞に戦ひて大に敗れ、紀元前一九〇年、タウラス山以西の地を割き、アルメニア Armenia の獨立を認めて和を媾じ、シリアは此より大に衰へたり。

シリア征  
伐

第三回ピ  
ニニク戦  
役

カーセー  
ヲ滅亡

マセドニ  
ア滅亡

羅馬は其後カーセーの復た隆盛に赴くを忌み、其隣國ヌミヂア Numidia と隙を生じたるに乗じ、紀元前一四九年、海岸を距ること數里の地に移轉せんことを迫り、カーセーは憤に堪えず、遂に第三ピニニク戦役起る。羅馬の將シピオ、エミリアナス Scipio Aemilianus 進んでカーセーを圍み、紀元前一四六年、之を陥れて、プロヴァンスとなし、名をアフリカと改めたり。

同年羅馬はマセドニアの亂に乗じて之を滅ぼし、更に希臘の國事に干渉し、屢々命に抗せるを名として之を滅ぼし、其名をアケイア Achaia と改め、マセドニアと共にプロヴァンスとなせり。次で北の方ゴールを討ち、其境域をアルプス山まで擴め、西班牙半島の全部をプロヴァンスとなし、紀元前一三三年、パーガモン Pergamon の王統絶えしかば、之を收めてプロ



羅馬共和  
制の腐敗

ヴェンスとなし、其名をアジアと改めたり。かくて羅馬は三大洲に跨る大版圖を有し、其領地より輸せる莫大なる租税を以て、市府を飾り、道路を開き、希臘風の文化を輸入して、外面極めて繁榮なりしが、安逸奢侈の風從て起り、道德次第に紊れ、元老院は漫りに威權を弄し、累代要職に就ける門閥家は賄賂私曲によりて巨利を貪り、貧者は土地を失ひ衣食に窮する狀況に陥り、古の貴族平民の争は一變して、貧富の黨争起らんとせり。

#### 第四課 羅馬の内亂 東方諸國

クラッカ  
ス兄弟の  
亂

紀元前一三三年、チベリアス、グラ、カス *Tiberius Gracchus* のトリビーンとなるや、貧民の爲に門閥家の權利財産を制限せんとして、却て門閥黨の爲に殺され弟ケイアス、グラ、カス *Caes*

0

ヌミチア  
征討

社會戰役  
SOCIAL WAR

*Gracchus* 亦トリビーンとなり、其遺志を繼ぎて、貧民の救済を務めしが、伊太利人に羅馬市民權を與へんとするに及び、其黨與と共に亦門閥家の殺す所となれり。かくて、貧富の黨争漸く激しからんとせし時、ヌミチア王私曲あり、門閥家に賂ひて其責罰を免れしかば、羅馬市民は政府に迫り、民黨の首領なるマリウス *Marius* をして、ヌミチアを攻めしめ、紀元前一〇七年、之を服したり。次でマリウスは中部歐羅巴に住せるセルマン人 *German* のゴールに侵入せるを防ぎ、紀元前一〇二年、大勝を得て之を退け、威望頗る高し。然るに伊太利人は市民權を得ざるを不平とし、大同盟を作りて羅馬に叛せしかば、羅馬は大に驚き、貧富一致してマリウス及びビストラ *Sulla* 兩人をして之を討たしめ、紀元前八八年、遂に之に市民權を許して鎮定することを得たり。



スラ、マ  
リアスの  
争

適、黒海東南岸のポンタス Pontus 王 ミスリダチス 六世 Mithridates VI 其近隣を征服して威を振ひ、紀元前八八年、アシア縣に亂入して羅馬人を虐殺し、進みてマセドニアを侵すや、スラ、選に當りて征討の途に上れり、マリウス不平の餘、貧民黨を煽動して大にスラの黨人を殺戮し、自らコンサルとなりしが、尋で死せり。此間スラは大にミスリダチスを破り、悉く其侵地を復し、償金軍艦を收めて和を媾じ、羅馬に凱旋して、復た大にマリアスの黨を殘殺し、新憲法を作りて門閥黨の權力を固定し、自らコンサルとなりしが間もなく退隱せり。此頃羅馬の海軍振はず、海賊地中海に横行し、羅馬附近をさへ掠むるに至れり、加ふるにマリアスの殘黨は西班牙に據り、ミスリダチスと通じて東西に亂を爲ししかば、元老院はポムペイ Pompey をして西班牙を討たしむ、ポムペイ英略あ

ポムペイ  
の武功

り、直ちに西班牙を討平し、海賊を掃蕩し、轉じてミスリダチスを撃破し、ポンタスをプロヴィンスとなし、尙ほアルメニア王のバリアを併せたるを奪ひて之をプロヴィンスとなし、パネスタインを朝貢國となして羅馬に凱旋せり。

### 第五課 三頭政治 *Triumvirate*

此時ジュリアス、シーザー Julius Caesar 貧民黨の首領たり、文武共に秀でて寛宏明敏にして大に衆心を得たり。適、元老院はポムペイの武功を忌み、其東方に於ける處分を是認せず、ポムペイ大に憤りシーザーと結び、クラサス Crassus を誘ひ、紀元前六〇年、約して第一回の三頭政治を作り、羅馬を分轄し、シーザーはゴールの太守となり、ポムペイはアフリカ及び西班牙を治め、クラサスはシリアを管せり。然るにクラサスは

第一回三  
頭政治



シーザーの武功

バルチアを討じ、メソポタミアに敗北せしかば、羅馬の東方に於ける威力大に衰へたり。

シーザーはゴールに入りてより前後八年に亘り、悉く不逞の徒を平げ、永く羅馬の風に化せしめ、ライン河 Rhine を渡りてゼルマン人を驅逐し、ブリタニア島 Britain に渡りて其一部を従へ、赫々たる武功を建てたり。此間ポムペイは獨り羅馬に止まり、シーザーの威名を忌み、元老院に結び之を召還せしむ。シーザー大に憤り、紀元前四九年、意を決して羅馬に侵入す、ポムペイは倉皇希臘に出奔せり。シーザーは大に敵黨を寛待して人望を收め、ポムペイを追ひて、フルセラス P. S. *arselus* に戦ひ、之を破りしかば、ポムペイは埃及に走り、土人に殺されたり。シーザー次で東方諸國を平定して羅馬に凱旋し、終身のデクテーター及びイムペラトル 大元帥 *Imperator* の職

シーザーの内治

第二回三頭政治

を兼ねぬ。

シーザー既に文武の大權を握り、各州民に市民權を與へ、殖民地を新設して貧民を救ひ、兵制を革新し、海軍を擴張し、地方の行政を整理し、商工學藝を獎勵し、曆法を改むる等其治績極めて舉りしが、元老院議員中に、之を嫉むものと、共和政治の顛覆を患ふるものとを生じ、ブルタス *Brutus* 等六十餘人私に黨を結び、紀元前四四年、シーザーを元老院の議事堂に刺殺せり。

時にシーザーの將に、アントニー *Antony* といふものあり、快辨を振ひてシーザーの功業を説きしかば、人民大に激動し、ブルタス等は希臘に逃れたり。アントニーはシーザーの甥にして養嗣子なるオクタヴ・アナス *Octavianus* 及びレピダス *Lepidas* と結びて、第二回の三頭政治を作り、ブルタス等を



アントニ  
の東方  
征討

オクタ  
イア  
ナス  
皇帝と  
なる

追ひて之をフロリッピ Philippi の野に破り。オクタヴィアナスは西  
方を取り、アントニーは東方を領し、レビダスはアフリカを  
治めしが、レビダスは間もなくオクタヴィアナスの爲に倒さ  
れたり。  
アントニーの東方に至るや、バルチアは羅馬の内亂に乗じ  
てシリア、パレスティンを略せり、アントニー即ち討ちて大  
に之を破りしが、バルチアに進むに及びて利を失ひ、還て埃  
及に至り、其女王クレオパトラ Cleopatra の容色に溺れ、羅馬  
の領地を割きて之に與へんとす、オクタヴィアナス其罪を責  
め兵を率ゐて之を討ず、アントニー敗死し、クレオパトラも  
自殺せしかば、オクタヴィアナスは埃及をプロヴィンスとなし、  
亞細亞地方を平定し、紀元前三一年、羅馬に凱旋して、イムペ  
ラトルとなり、次でシーザー、アウガスタス Caesar Augustus の

アウガ  
スタス  
の政  
略

アウガ  
スタス  
の外  
征

尊稱を得、文武の大權を總攬せり、此に於て羅馬は共和制の  
實を失ひ帝政となる。

### 第六課 羅馬帝政の初期

アウガスタスは人心を籠絡せんが爲め、尙ほ元老院其他共  
和時代の諸官職を存置せしも、要職は悉く之を一身に兼ね  
近衛兵を組織して其權力の強固を圖り、羅馬の領地を皇帝  
直轄地及び元老院管轄地の二に分ち、直轄地の地方官は、皆  
其任命する處なれば、帝の權力は羅馬を中心として各地に  
普及せり。

アウガスタスは初め意を外征に注ぎ、東はバルチアと和し、  
西は西班牙の西北よりライン Rhine 河左岸の地を略してゼ  
ルマン人を驅逐せしが、紀元九年、其軍チートブルグ Teutburg



黄金時代



アウグスタスの像

の森に於て敗るるに及び、外征を斷念し、國境に多く城砦を築き蠻人の侵入に備へしむ

帝は又大に風俗を改良し、羅馬市街に水道、道路を修築し、コロッセウム Coliseum 及びカピトル Capitol 等の大建築を起し、文學美術を奨勵せしかば、詩人にはヴァーシル Virgil、ホーニス Horace 出で

歴史家にはリヴァー Jivy 出でたり、建築も亦希臘風と羅馬固有のエドラスカン風との融合より所謂羅馬風建築をなせり、而して基督教の開祖、耶穌基督 Jesus Christ の生誕も、亦アウカスタス治世中、紀元前四年なりき。アガガスタス家は國を治むること五代、百年にして帝政漸く固定せしが、紀元六八年、其統絶え、帝位は一時將帥の手に歸せり。

第七課 羅馬帝國の盛衰

其帝時代

紀元六八年、シリアの鎮將ウエズパシアン Vespasian 帝位の昇り、フリゲニアを討平し、セルサナムを陥れ、其人民を四方に放逐し、紀元七〇年、其統國を治むること三世二十七年(紀元六六年)にして絶え、其後相繼ぎ位に即ける五帝は皆賢明にして



て帝國の盛榮其極に達せり。就中トラスジャン Trajan (紀元一七八年) はダニユー河 Danube 以北及び亞刺比亞 Arabia 北部の地を略して、羅馬版圖の最大を致し、更にバルチアに侵入して殆ど之を滅ぼさんとせしが、陣中に歿し、次の帝は其侵地を返して和を結べり。マーカス・アウレリウス Marcus Aurelius (紀元一六〇年) は北方に侵入せるセルマン人を擊攘し、バルチアを伐ちて、メソポタミアの北部を奪ひ、羅馬文化の黄金時代と稱せらる。

軍人の跋

然れども帝國の衰弱は漸く此頃より始まり、道德腐敗し殖産退歩し、紀元一八〇年、アウレリアス帝の歿するや、軍人驕暴を極め、賄賂によりて恣に己の好むものを奉じ、爾後百年の間に帝となりしもの二十四人の多きに及べり。此頃、波斯の故地にアルデシル Aradeshir といふもの起り、紀

中期波斯

セルマン人種

元二二六年、バルチアを滅ぼし、ササン朝 Sassanidae の中期波斯を建て、羅馬の東方に侵入して、アルメニア、メソポタミアを奪へり。北方には、セルマン人の各種族頻りに活動し、フランク人 Franks はゴールに、アラマン人 Alaman は伊太利に、ゴス人 Gosh は、ダニユー河邊に亂入し、羅馬帝國は四分五裂の狀況を呈せり。

ディオクレシアン帝

紀元二八四年、ディオクレシアン Diocletian (紀元三〇四年) 帝位に即くや、大に帝國の衰勢を挽回せんとし、軍人を壓服し、元老院の權を削り、版圖を二分して自ら東部を統轄し、將軍マキシマス Maximus をして西部を督せしめ、次で東西に各一人の副帝 Caesar を置きて、其領土を分轄し、政務を補佐せしめ、以て各地の叛亂を平げ、外敵を防ぐことを得たり。然れど



コンスタ  
ンチン大  
帝

も其歿後、繼嗣に關して又紛擾を生じ、一時に六帝あるに至りしが、紀元三二三三年、コンスタンチン大帝 *Constantine the Great* 再び帝國を統一せり。

基督教

### 第八課 基督教の蔓延 帝國の分裂

紀元前四年、耶蘇基督 *Jesus of Bethlehem* に生れ、自ら救世主と稱し、一神の信ずべきを説き、*Jesus* 教の虚禮を排し、博愛主義を唱へたり。*Jesus* 人は之を以て異端となし、羅馬代官の命により、叛逆の罪を以て基督を磔刑に處せり。是に於て、其弟子は四方に散じて布教を務め、セント・ポール *St Paul* は羅馬に來りて其教を説けり。

羅馬人の  
信仰

當時、羅馬人の大統一主義極端に達し、羅馬の文化に浴するものは、悉く羅馬人を以て遇せんとし、宗教の如きも、各地方

皇帝の迫  
害

に特有なる形式教義を具へたるものを喜ばざるに至り、帝國政府は、皇帝崇拜の宗教を作らんして失敗せしが、今やその博容主義に投合する基督教の傳來するに及び、人民は熱心に之を歓迎信仰せんとせり。然るに皇帝は、基督教を以て皇帝の尊嚴を損じ、帝國の治安に害ありとし、當時、賢明善良と稱せられし諸帝は、皆大に基督教徒を迫害し、ポールの如きも、死刑に處せられたり。

ニケーア  
會議

コンスタンチン帝(紀元三二三三年)は、始めて自ら基督教を奉じ、之を國教とし、紀元三二五年、ニケーア *Nicaea* に宗教會議を開き、基督教各派を調和して一に歸せしめんとし、其決議により、アタナシウス派 *Athanasianism* を以て、正教 *Catholic* と定む。此より基督教は、帝國內のみならず、北は、セルマン人、東は、波斯人中にも蔓延せり。



コンスタンチン帝の内治

帝國の分裂

コンスタンチン大帝は、また都をビザンチウム Byzantium に遷し、之をコンスタンチノープル Constantinople と改め、行政を改革し、宮内の儀式を定め、大に皇帝の尊嚴を加へたり。帝の歿後、帝國は復た分裂し、次で、ゲルマン人の大移轉始まり、セオドシウス帝(紀元三九四年同三九五年)一度び之を統一せしも、紀元三九四年、其歿するに先ち、長子アルカヂウス Arcadius に東部を、次子ホノリウス Honorius に西部を分與し、羅馬帝國は、これより全く東西に分裂せり。

## 第二篇 中世史

### 第一章 暗黒時代

#### 第一課 ゲルマン種族の遷徙

ゲルマン人の部族

羅馬の悉く地中海沿岸を征服せる頃、歐洲中部に一新蠻族勃興せり。之をゲルマン人 German 又はチートン人 Teuton といひ、シーザーのゴールに太守たりし時、大に其打撃を蒙りたりしが、漸次、ゴス Goth フランク Frank アラマン Alaman サクソン Saxon ロムバルド Lombard バーガンヂマン Burgandian スエヴ、Suevi 等、數十の部族に分れ、万有を拜する多神教を奉じ、資性慥悍、戰鬥を好み、牧畜漁獵を業とし、アウガスマス帝以後、頻りに羅馬帝國內に侵入して、邊境に雜居し、又は、帝國の爲に兵役に服して、羅馬化するもの少からず。



ヴィシネ  
ス人の移  
轉

三七五年、ヴォルガ Volga 河邊に住せる、蒙古種の一派ハン人 Huns(匈奴)が、他の蒙古種に迫られ、西轉して、黒海北岸のオス  
トロゴス人 Ostrogoth を征服し、更に進みて、ヴィシゴス人 Visi-  
goth に迫れり。此に於て、所謂種族の大遷徙 Migration of Races  
起れり。  
ヴィシゴス人は羅馬帝に請ひ、三七六年、難をモシア Moesia に  
避けしが、忽ち其虐待を怒り、大舉して南侵し、大に羅馬軍を  
破り、三七九年、セオドシアス帝位に即くに及び、和を結べり。  
然るに羅馬の東西に分るるや、ヴィシゴス王アラリック Alaric は、  
東羅馬の宰相と結び、伊太利に侵入せり。西羅馬の宰相スチ  
リコ Silico 撃て之を退け、イリリカム Illyricum の地を與へ  
て之を和せんとせしが、四〇八年、西帝の怒に觸れて殺さる。  
此間、ゴールの守備弛みしに乘じ、フランク人は、プールの北

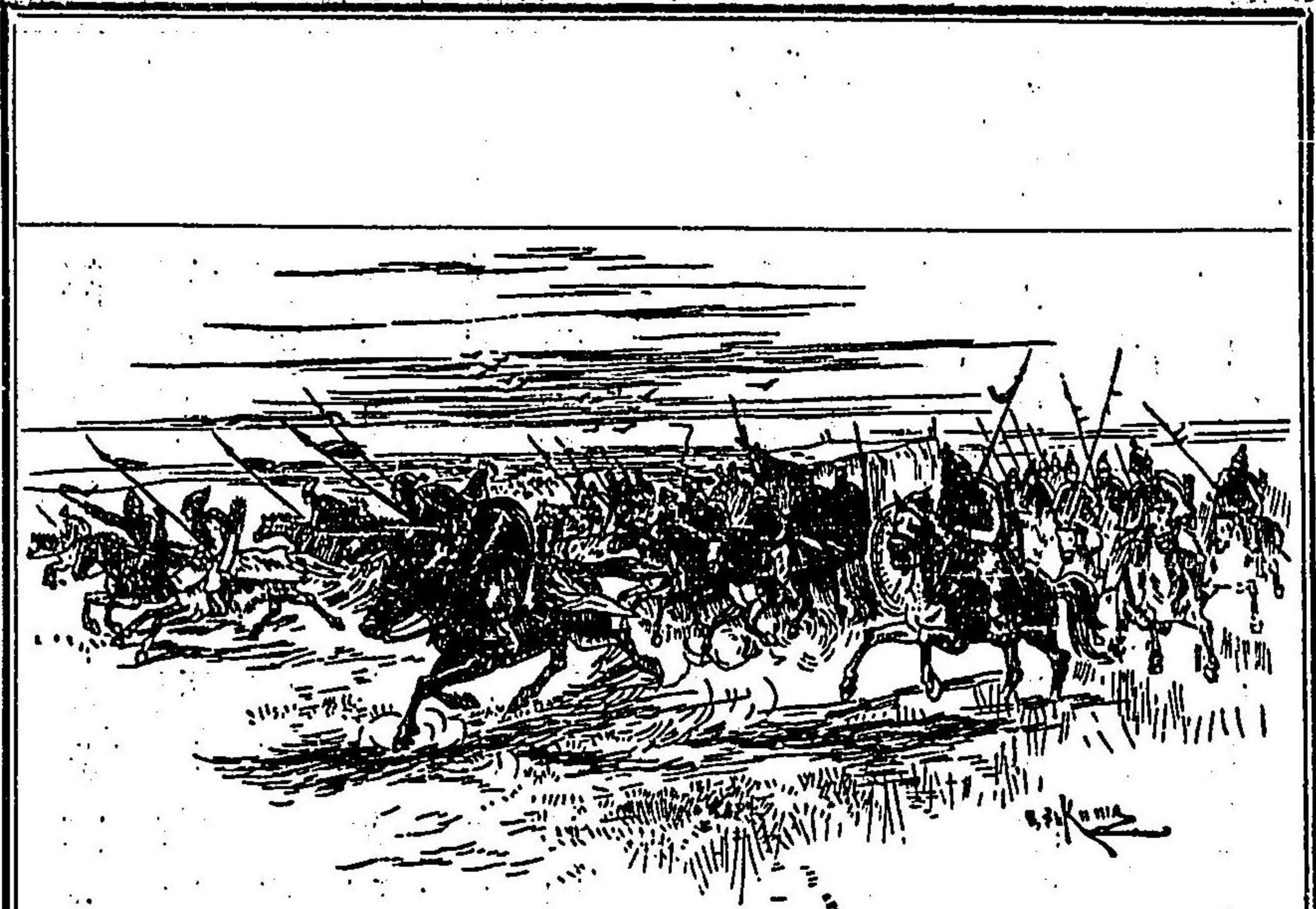
アラリッ  
ク

ヴァンダ  
ル王國

アッチラ

部を、アラマン人及びバーガンチアン人は、其東部の地を占  
領し、今の匈牙利地方に住せし、ヴァンダル人、スエヴ人等は、急  
行西進して、西班牙半島に據れり。  
アラリックは、また伊太利を侵し、四一〇年、羅馬を陥れしが、幾  
もなくして死せしかば、其部族は、西帝と、ゴール鎮定を約し  
て、西班牙に移住し、其地に、ヴィシゴス王國を建てたり。此に於  
て、スエヴ人は、その西北隅に蹙まり、ヴァンダル王ゲンセリック  
Genserico は、其部下を率ゐて、四二九年、亞非利加に入り、ヴァンダ  
ル王國を建てたり。此頃、バーガンチアン人も亦、ゴール東南  
部に建國したり。  
ハン王アッチラ Attila は、此頃、バルチック海 Baltic Sea より、ダニ  
ブ河に至る地を征服し、東羅馬を侵して、歳貢を徴し、轉じて  
ゴールを席卷せんとす。西羅馬の宰相エーチアス Aetius は、





ウシゴス人及びフランク人と連  
 合し、四五一年、カタラウニア *Catalaunia* の野に戦て之を破る、アチラ、  
 乃ち轉じて伊太利に入り、歳貢を  
 約して國に歸る、四五三年、其死す  
 ると共に、ハンの大國瓦解し、諸族  
 皆獨立せり。  
 四五五年、ウन्दアル王ゲンセリク  
 も羅馬を侵し、が掠奪を恣にせ  
 るのみにて引き還せり。爾后、西羅  
 馬は衰弱甚しく、實權は其雇兵た  
 るウシゴス人に歸し、四七六年、其  
 將オドアサー *Odoacer* 東帝に請ひ、

西羅馬滅亡

フランク王國

セオドリック

アリタニア王國

西帝を廢して、西羅馬帝國を滅ぼし、自ら伊太利王と稱せり。  
 此に於て西羅馬の故地は、悉く、ゲルマン人種の據る處とな  
 れり。

フランク王クロヴィス *Clovis* は、四八六年、ゴールの諸國を奪  
 ひ、四九六年、アラマン人を征服して、其地を併せ、五〇七年、ウ  
 シゴスの地を削りて、境をガロン河 *Galonne* まで擴め、都を巴  
 里 *Paris* に奠めて、漸く強大を致せり。

オストロゴスは、ハンの瓦解後、獨立して東帝に請ひ、パンノ  
 ニア *Pannonia* に任ぜしが、其王セオドリック *Theodoric* は、オド  
 アサーと隙を生じ、四九三年、伊太利に侵入し、オドアサーを  
 倒して其地を奪ひ、勉めて羅馬の文化を採用し、威を近傍に  
 振へり、ロムバルド人乃ちオストロゴスの故地に據る。

四五〇年頃より、歐洲西北海岸に住せるジュート *Jute* アング



ル Angle サクソン Saxon 等の諸族は、ブリタニアに侵入して、其地に住せるブリトニ人 Briton を驅逐して、七王國を建てたり。

### 第二課 東羅馬と波斯

ジャスチニアン帝の外征

東羅馬も亦、蠻人侵入の爲に國勢振はざりしが、五二七年、ジャスチニアン Justinian 帝位に即くや、先づ國教反對者を罰し、希臘哲學を講ずることを禁じて、政教上の紛争を治め、次で舊帝國を恢復せんとし、名將ベリサリアス Belisarius をして波斯を討たしむ。

波斯

此頃、波斯は、南方亞細亞に勃興せる嚙噠 Ephthal の侵寇に苦みしが、東帝の侵略に驚き、急に嚙噠と和し、ベリサリアスと戦ひ、五三一年、其中興の英主ユスロース一世 Chosroes I 立つ

ジャスチニアン帝の内治

に及び、且、和を結び、人々を安んずるに及ぶ。ジャスチニアン帝乃ち西に轉じ、五三四年、ヴァンダル王國を滅ぼし、オストロゴス王國を攻む。波斯王ユスロース一世は、東帝の威力大ならんとするを忌み、オストロゴスと結び、東羅馬と戦を開き、ジャスチニアン帝は、五五五年、オストロゴス王國を滅ぼして、伊太利を復し、西班牙の南部を併せしが、五六二年、遂に波斯と和せり。波斯は、此より専ら嚙噠を防ぎ、次で中央亞細亞に起れる突厥 Turk と結び、嚙噠を滅ぼせり。ジャスチニアン帝は、また處々に大建築を興し、有名なる大法典を編纂せしめ、始めて支那より養蠶の業を傳へ、其境域を維持せんが爲め、大に邊境に城砦を設け、カウカサス山地方のアヴァール人 Avar を、ダニュープ河邊に移し、東歐のスラヴ Slav 諸族に當らしめたり。



ロムバルド王國

波斯及東  
帝國の衰

然れども五六五年帝の歿するや、諸將功を争ひて内亂を生じ、アヴァールの跋扈を防ぐ能はず、ロムバルド人は、伊太利に侵入し、五六八年、其大半を略して王國を建て、特殊の法律を設け、製造貿易に従事せり。

波斯は、コスロース二世父に繼ぎ、アヴァール人と結び、東羅馬の内亂に乗じて、小亞細亞を略し、コンスタンチノープルに迫りしが、六一二年、ヘラクリアス *Heraklius* 帝位に即きて、之を破り、進みて、メソポタミアに入り、悉く其地を恢復せり。既にして和成り、互に侵地を還し、が兩國共に疲弊して、其勢復た振はず、スラヴ諸族はイリリカム地方を占領して、東帝國の西方の領地は愈々蹙まれり。

第三課 サラセン人の勃興

サラセン人

モハメド

サラセンの  
外征

亞刺比亞人 *Arabian* は、又サラセン人 *Saracen* と稱し、幾多の部落に分れ、大部分は牧畜を業とし、其西北に住せるものは、稍ジデア、波斯等の感化を受け、隊商を組み、各地に行商し、偶像教を信ぜり。五七一年、モハメド *Mohammed* メッカ *Mecca* に生れ、ジデア、基督兩教を參酌して、イスラム教 *Islam* (回々) を創めしが、市民の迫害を受け、六二二年、メヂナ *Medina* に逃る。此をヘジラ *Hegira* といひ、回々教徒は、此年を以て紀元となす。

モハメドは、此地に於て勢力を得、メッカを陥れ、亞刺比亞全土を統一し、サラセン國(大食)を建て、偶像教を驅逐せり。六三二年、其死するや、繼承者は、皆カリフ *Caliph* と稱し、政教の兩權を握り、其聖經 *Koran* 及び朝貢、刀劍の三者を以て、外國征服の手段となし、先づシリア、埃及を略し、六四一年、波斯を滅ぼし、唐の西部を侵し、都をダマスカス *Damascus* に奠



サラセン  
國の分裂

め、頻りにユンスタンチノールに迫りしが、其陥れ難きを見、轉じて亞非利加の北岸を従へ、進みて西班牙半島に入り、七一一年、ウシゴス王国を滅ぼし、七三二年、ゴールを侵し、フランク王国の宮宰 *Mayor of Palace* チャーレンス・マーテル *Charles Martel* の爲めに破られて退きぬ。爾後、基督教徒は熱心に、サラセン人の侵入を防ぎしが、サラセン國、又内亂を生じ、七五〇年、アバサ家 *Abbasides* は、バグダド *Bagdad* に都し、オムミア家 *Omiad* は、西班牙に逃れて、七五五年、ユルドヴ *Cordova* に都し、東西のカリフに分裂せり。東西のカリフは、盛に文學技藝を奨励し、商工業大に發達し、第八世紀に於て、バグダドは、東西貿易の中心となり、其富強天下に冠たり。

#### 第四課 基督教會の發達 羅馬法王

僧侶の階級

此より先き、基督教は益、弘通の力を強め、ニケーア會議に逐はれたる一派は、遠く北歐に入りて、セルマン人種に布教し、正教派も、頻りに四方に布教して、各地方に教會を組織し、役僧を撰擧して、其教會の事務を處理せしめしが、漸次僧侶に階級を生じ、都府の大僧正は地方の僧正を任命し、地方の僧正は、また下級の僧侶を任命するに至り、就中、羅馬の大僧正は、俊傑相次ぎて輩出し、フランク人、ロムバルド人、ウシゴス人等を改宗せしめ、其習慣言語を羅馬化せしめ、羅馬文明の絶滅を救ひしが、第六世紀の末、グレゴリー一世 *Gregory* の羅馬大僧正となるや、東羅馬皇帝より教權を獨立せしむべきを主張し、僧侶及び元老院の協賛を経て、法王 *Pope* と稱し、全く皇帝の干渉を脱せり。

羅馬法王



東羅馬の  
畫像禁止

東羅馬は、其西方の領土を失ひしと共に、漸く以太利風を失ひしかば、或は希臘帝國と稱するに至り、ヘラクリアス帝の歿後、内憂外患交、臻り、國勢大に衰へたり。七一七年、レオ三世 Leo III 位に即くや、サラセン人を撃退して、コンスタンチノールブルの國を解き、制度を改革して、大に帝國の面目を一新せしが、偶、畫像禮拜の可否論を生じ、否論者なるイコノクラスト Iconoclast 勢力を得しかば、レオ三世は、七二六年、基督敎徒一般に畫像禮拜を禁ぜり。

然るに、此事は、蠻人の感化と寺院の收入とに大關係を有するが故に、時の法王グレゴリー二世は、大に之に反對し、遂に戰爭を生じて大に帝軍を破り、法王は、イコノクラストを外道なりと宣言し、政敎上、全く、東帝より獨立することとなれり。爾後東羅馬の宗教を、希臘特加力 Greek Catholic と稱し、羅馬

東西基督  
敎の分裂  
系圖

の宗教を、羅馬加特力 Roman Catholic と稱するに至れり。已にして東羅馬に反動起り、七八〇年、女帝イレネ Irene は、畫像禁止令を廢せしが、一旦分離したる教會は、遂に合一の期なし。

### 第五課 シャーレマン帝國及び其分裂

系圖第一  
參照

フランク王國は、クロヴスの後、暗弱の君主のみにして、其實權、遂に宮宰なるカロウインジアン家 Carolingian に歸し、サラセン人の西班牙より侵入するや、チャーレス・マーナル之を迎へ撃ちて大に破り、基督敎徒を保護せしより、愈、其名聲を高め、羅馬法王も、ロムバルド人の侵略を防がんが爲め、其保護を求め、七五一年、チャーレスの子ピピン Pippin を助けて、フランクの王となせり。ピピン乃ちロムバルド人を討じ、其侵地を

ピピン



征  
マンの外  
シヤレマン

法王に献ぜり、法王の領土を有すること此に始まる。  
七六八年、ピピン死し、其子チャーレス嗣ぎて、フランク王となる。即ちシヤレマン



シヤレマンの像

Charlemagne なり。王は  
一世の英傑にて、七七  
四年、ロムバード王國  
を滅ぼし、伊太利王を  
兼ね、アヴールを滅ぼ  
し、ノルマン Norman を  
撃退し、スラヴを討じ、

西班牙の北部を略し、其領土西はエプロ河 **Elbro** より、東はエ  
ルベ河 **Elbe** に及び、北は、オデル河 **Oder** より、南は、タイバ  
河以南に達せり。八〇〇年、法王レオ三世乃ちシヤレマンの

再興  
西帝國の

シヤレ  
マンの内  
治

ヴェル  
ダン條約

頭に加ふるに、西羅馬皇帝の金冠を以てせり。此に於て、セル  
マン人西羅馬を再興し、從來相衝突せる、羅馬、セルマンの兩  
分子は、漸く融合の道を得たり。  
シヤレマンは、其大版圖の統治を固くせんが爲め、都をエー  
クス、ラ、シヤル **Aix-la-chapelle** に奠めて、大政を統轄し、領内を數  
多の州及び寺領に分ち、侯伯、僧正を置きて、之を分治せしめ、  
別に帝室領地を設けて、帝室の費用に充て、巡察使を派して、  
民情非違を檢察せしむ。また毎年一回、五月合議 **Mayfeld** を  
開き、侯伯、僧正及び兵士等を會して、其助言を求め、農工を保  
護し、學藝を奨勵し、寺院を建て、學校を興し、大に文化の發達  
を促せり。  
八一四年、シヤレマン帝死し、子ルイ **Louis** 嗣ぎしも、暗弱にし  
て、其四子互に争ひ、騷亂止まず、遂に八四三年、ヴェルダン **Ver-**



フランク  
國最後の  
分裂

Dun の條約により、長子ロサール Lothar は、中部フランクを  
得て帝號を稱し、第三子ルイは、東部フランクを、第四子チャ  
レスは西部フランクを得たりしが、次でロサールの死する  
や、中部フランク西北の地は、東西フランク兩王の分割する  
所となり、ロサールの子、ルイ二世は、特り伊太利のみを有し  
て、依然帝號を稱せり、  
其後、西フランクはノルマンの侵寇に苦み、東フランク王チャ  
レスを迎へて王とし、東西再び合同せしが、其無能なるを  
見て、八八七年、東西共に之を廢し、フランク國は、遂に最後の  
分裂をなせり。

東フラン  
ク

此に於て、東フランクにては、アルヌルフ Arnulf 王位に即き、  
國王を統一し、ノルマンを撃攘し、マジール Magyar (トルコ種に  
せし蠻族) を征服して、獨逸國の基礎を固め、次で伊太利を征

系圖第二  
參照

し、帝位に即きしが、後嗣暗弱にして、其統また絶えしかば、九  
一一年、諸侯伯相會して、フランコニア Franconia 公コンラッド  
一世 Conrad I を推して王位に即かしめ、獨逸は、此より選王  
制となれり。

西フラン  
ク

西フランクにては、ノルマンを防ぎて功ありしパリ Paris 伯  
オドー Odo 立ちて王となり、レオン Leon に王を稱せる、カロ  
ヴィンジャン家のルイ三世と争ひしが、レオンの王統絶ゆる  
に及び、九八七年、パリ伯の親戚ヒューカパー Hugh Capet 王と  
なり、カペチアン Capetian 家を創め、ローマンス語を用ひ、拉丁  
文化を維持し、佛蘭西國の基を開きたり。

系圖第四  
參照

### 第六課 ノルマンの横行

ノルマン

ノルマンは、スカンヂナヴィア Scandinavia に住し、資性勇敢に



ノルマン  
ディー

して冒険を好み、漁業を營みしが、其人口の繁殖に伴ひ、遠く海外に出でて、各地を劫掠するに至れり。  
ノルマンは、第九世紀の頃より、屢、フランク國を侵し、東フランクにては、アルヌルフ王の撃退する所となりしも、西フランクは、内亂相次げるを以て、之が防禦に苦み、九一一年、ノルマンの將、**ロロロ Rollo** を、ノルマンディー公 **Drke of Normandy** に封じて相和せり。

エグバート

ブリタニアにては、八二七年、エググート **Egbert** 七國を統一して、英吉利王國を建てしが、又ノルマンの一派なる、**デーン人 Danes** の來侵に苦しみ、エグバートの孫、**アルフレッド大王 Alfred the Great** 勇武にして、よく之を防ぎしも、其死後、一〇一七年に至り、**デーン人**の將 **カニート Canute** 英國を併呑して、其王となり、**丁抹、諾威、及び瑞典の一部**を兼領して、威を遠近

ウィリアム  
の英國  
征服  
Norman  
Conquest

系圖第五  
参照

ネーブル  
ス王國

露國の基  
礎

に振へり。其後、一〇四二年、舊王統の **エドワード Edward** 位に復せしが、其歿するや、**ノルマンディー公 ウィリアム** は、母系の姻戚たるを口實として、**法王の許可を得、一〇六六年、英國に上陸し、ヘスチングス Hastings** の一戦に之を平定し、**英王ウィリアム一世**と稱し、**英佛の習慣言語を融化して、英國特有の文化**を基めたり。

**ノルマン**は、また**地中海沿岸及び其島嶼**をも侵し、其將 **ロバート、ギスカルド Robert Guiscard** は、**第十一世紀の初め、悉く南部伊太利を征服し、東帝國に寇して大勝を得、また、シシリーを、サラセン人より奪ひ、ネーブルス王國を建て、法王を助け、學校を興し、農工業を奨励して、繁榮を極めたり。**  
**ノルマンの一部は、其將 リーリク Rurik** に従ひ、**東の方、フィンランド Finland** に上陸し、**八六二年、ノヴゴロド Novgorod** に據り、



近傍のスラヴ人を征服して、之と雜婚し、所謂ルズ人種 *Rus* を作り、露西亞建國の基をなし、同時に、他の一部はキエフ *Kyiv* に移りて獨立せしが、リューリクの後嗣は之を併せ、更に南下して東帝國を侵し、之と通商條約を結びて、漸次盛大となれり。

ノルマンは、尙西航して、アイスランド *Iceland*、グリーンランド *Greenland*、及び北亞米利加に移住し、蠻人移轉の最後をなせり。

## 第二章 復活時代

### 第一課 神聖羅馬帝國 法王權の隆盛

獨逸王 *Conrad* 一世は、位をサクソン *Saxony*、ヘンリー

系圖第二  
參照

オット大  
帝

神聖羅馬  
帝國

帝權の伸  
張

一世 *Henry I* に譲り、ヘンリー一世はマジールを討ち、デーニを破り、諸侯を抑制して、王權の擴張を計りしが、其子オット一世 *Otto I* 嗣ぎ、亦英邁にして諸侯の叛亂を鎮定し、其地を近親に與へて王權を固め、九五五年、マジールを破りて、永く其患を絶ち、次で伊太利を平け、九六二年、王 *John XII* をして、己に帝冠を加へしめ、神聖羅馬皇帝 *Holy Roman Emperor* と稱せり。此より獨逸王は、伊太利王を兼ねしが、歴代、力を伊太利に用ひ、本國を顧みるに違なく、遂に諸侯の跋扈を招きたり。

オット一世の後、五十餘年にしてサクソン王統絶え、フランコニア公 *Conrad* 二世位に即き、バーガンデー王の遺領を併せて、帝室領を擴め、其子ヘンリー三世も、王權を盛にして諸侯を抑制し、伊太利に行きて法王を廢立し、恰も大に腐敗せ



皇帝と法王との衝突

る羅馬教會を救正せしが、法王は却つて、此より益、權力を養ひ、遂に皇帝の政治的統一の理想と、法王の宗教的統一の理想とは、一大衝突を生ずるに至れり。

一〇七三年、グレゴリー七世法王となる。英邁にして雄略あり、先づ羅馬本山の大改革を行ひ、僧侶の妻帯を禁じ、僧官賣買を停め、更に僧官封地の權を、皇帝より奪はんとするに及び、皇帝ヘンリー四世(一〇五六)大に怒り、宗教會議を開きて法王を廢す。法王も亦帝を破門し、其臣民に服従の義務なきことを宣言す。偶、ヘンリー四世に對して帝位を争へるサクソニア公叛し、諸侯多く法王の命に従ひしかば、ヘンリーは之を鎮定すること能はず、一〇七七年、親らカノッサ Canossa に至り、哀を法王に請ひ、雪中に立つこと三日にして、漸く其破門を許されたり。次で法王のヘンリーを廢せんとするに及び、

系圖第三

ウエルフ、ワイブリンゲン

法王權の隆盛

獨逸の人民大に勤王の心を起し、ヘンリーを奉じて伊太利に入り、クレメント三世 **Clement** を立てしかば、グレゴリーは、サレルノ **Salerno** に逃れて憤死せり。其後、皇帝と法王との争ひ、尙止まず、一一二二年、ヘンリー五世は、ウォルムスに和議を結びて、法王の下風に立つ如き狀を呈せり。

一一三八年、ホーヘンスタウフェン家 **Hohenstaufen** の祖、コンラッド三世位に即き、バウリア家 **Bavaria** と争ふや、ウエルフ **Welfo** ワイブリンゲン **Weiblingen** の二黨を生じ、前者は法王の助を借りしより、法王黨の異名となり、後者は皇帝を助けて、また法王と争ふに至れり。フレデリック一世 **Frederik I** 嗣ぎて立つや、ウエルフ黨の首領、サクソニー公ヘンリーを逐ひて、其領地を奪ひ、次で伊太利を統一せんとせしが、法王黨の妨害に遇ひて果さず、其子ヘンリー六世に至り、ネーブルス王國を併



大空位時代

せて、其遺志を継ぎしが、黨争益甚しく、法王インノセント三世(一一九八)は、英國の國事にも干渉し、其王ジョンを困めて、法王の命に従ふことを誓はしめ、獨逸にては、己の後見せるフレデリック二世を立て、其權力の絶頂に達せり。されば、コンラッド四世は、全く獨逸を放擲して、専ら力を伊太利維持に用ひ、其歿するや、ホーヘンシュタウフェン家絶え、諸侯は各、其好む所のものを立てんとして、攻争し、遂に二十三年間(一二五六)帝位に即くものなく、所謂大空位時代 *Interregnum* を現出せり。

第二課 十字軍

東西の回教國は、第九世紀頃より大に衰へ、西班牙半島に於ては、北方の山間に據れるウシゴス人、漸次力を恢復し、レオン Leon・カスチラ Casila・アラゴン Aragon・ナヴァール Navar 等の

サラセン國の衰頹

靈地巡拜

基督教國を建て、一〇三二年、ユルドヴァのオムミン家絶えて、其國分裂せるに乗じ、頻りに其地を蠶食し、第十三世紀の初めには、異教徒の領する處は、グラナダ Granada の一國に過ぎざりき。

バグダッドのアッバス家も内亂を生じ、小邦に分裂したりしが、第十世紀の終りに、セルジク・トルコ Seljuk Turks 波斯の北部に起り、西南亞細亞及び埃及を略し、印度の西北部を侵し、一時威を四隣に振へり。

當時、歐羅巴の人民は、信仰熱心の餘、セルサレムの靈地に巡禮するもの甚だ多く、サラセン人の其地を領せし間は、巡禮者より利を得ること多きを以て、之を好遇せしが、トルコ人の之を奪ふに及び、基督教徒を虐遇すること甚だし、偶、佛國の僧ピーター Peter 其慘狀を目撃して、還り、熱心、聖地恢復を



クライモ  
ント會議

第一十字  
軍

第二十字  
軍

唱へて、大に人心を激動せり。此時、東帝もトルコ人の侵寇に苦み、遙に書を寄せて、援を法王に乞ひしかば、法王ウルフは、二世 Urban II は、一〇九五年、大に諸國の僧侶をクライモント Clermont に會し、聖地恢復の舉を勸奨せり。衆皆感激し、奮ひて軍に加はらんことを請ひ、翌年八月を以て出發の期となし、十字の徽章を隨することとなれり。十字軍の稱之に起る。狂熱に驅られたる鳥合の衆、先づ發せしが、小亞細亞に於てトルコ人に鑿殺され、本軍は主として、佛國諸侯より成り、一〇九六年、ブーロン Bouillon 伯、ゴッドフレイ Godfrey を將として、小亞細亞に入り、一〇九九年、數十日の苦戰の後、セルサレムを陥れ、ゴッドフレイを聖地の守護職となしたり。此を第一十字軍となす。

ゴッドフレイの弟バルドウィン Baldwin の時に至り、セルサレム

第三十字  
軍



王と稱せしが、其後、トルコ人の侵寇に遇ひ、危急に迫りしかば、一一四七年、獨帝コンラド二世、佛王ルイ七世と共に之を救はんとして發し、コンラドは病歿し、ルイは利を失ひて、一一四九年、空しく歸國せり。之を第二十字軍となす。

既にして、サラチン Saladin といふもの、埃及に起り、チグリス河以西の地を略し、セルサレムを陥れ、聖地は、再び回教徒の手に歸せり。獨帝フレデリック一世、佛



第四十字軍

拉丁帝國

ニケーア帝國

王、フリッポ二世、英王リチャード一世と共に之を恢復せんとし、一一八九年、第三十字軍を起し、が、皇帝は小亞細亞に溺死し、佛王は英王と隙を生じて軍を班し、英王獨り、聖地に至りしが、遂に功を收むること能はざりき。

此に於て、法王インノセント三世は、佛獨伊の諸侯に命じて出征せしむ。然るに、諸軍は、海路、東帝國に至り、其内亂に乗じて之を顛覆じ、一二〇四年、拉丁帝國 Latin Empire を建立せるのみ、第四十字軍も亦目的を果さずして止みき。東帝國は此より、都をニケーアに移して、僅に命脉を保ち、一二六一年に至りて、漸くコンスタンチノープルを恢復することを得たり。

其後、尙ほ數回の十字軍企てられしも、皆効を奏せず。一二九一年以後、基督教徒は、全く亞細亞に根據地を失ひ、遂に聖地

恢復の目的を達すること能はざりき。

### 第三課 西歐の制度及び國情

封建制度

君臣の關係

封建制度 Feudal System は中世社會の特徴にして、其起源はフレンク人がゴドルを占領したる時にあり。當時、貧民は連年の戦争によりて疲弊し、地方の豪族に依頼して、從臣 Vassal となり、其土地を耕作して衣食し、戰時其主人 Senior に從ひて出陣するを以て酬となせしが、此風漸く行はれ、主も亦其侵地を臣民に分與して、封土 Fief とし、從臣は君主に對して、(一)戰時には君命に應じて從軍し、(二)君主の領内の行政費を負擔し、(三)君主捕虜となりたる時は償金を出して之を救ひ、(四)君主の長子元服し、又は長女の結婚する時は献金する等の義務を有す。若し從臣にして子孫絶え、又は義務を盡さ



封建制の確立

ざる時は、君主は其封土を没收す。此制度は、第十世紀の頃より歐洲諸國に傳播し、私領を有するものも、表面上之を帝王に献じ、改めて封土として之を受領することとなり、其君臣の關係は次第に複雑となり、一人にして、數人の君主に従臣となることあり。又大君主にして、小君主の從臣となることあり、僧侶も、其寺院に附屬せる地に據り、從臣を蓄へて、宗教的諸侯となりき。

義騎制度騎士

封建制に伴ひて、義騎制度 Chivalry も發達せり、此階級に屬せる騎士 Knight は、初め君主の從臣にして、貴族と平民との間に位せる一階級なりしが、第十二世紀の頃より、其武勇を表章する榮稱となり、騎士とならんとするものは、初めより、王侯貴婦人の扈從となりて、禮節を習ひ、騎士の從士となりて、武技を學び、悉く之を習熟したる時は、嚴重なる宗教上の儀

暗黒代時

式を以て騎士となることを許され、敬神・忠君・勇武・仁俠を誓ひ、特に婦人を尊敬保護することを義務となせり。初め西羅馬の顛覆するや、舊時の文明は滅びて、世は所謂暗黒時代 Dark Age となりしが、此間、僅に文化の絶滅を防ぎしは、基督教の力にして、當時の文學・美術等、何れも其陰鬱たる迷信の影響を蒙らざるものなく、僧侶は、人民の迷信を利用して、勢力を得、法王の如きは、各國の帝王に命令する程の勢力ありしが、一方には、また幾多の團體を設けて、宗教の弘布、社會の救濟をつとめしかば、騎士は、此等の團體と相待ちて、諸種の團體を作り、仁俠の實を行へり。就中、テンプル騎士団 Teutonic Knights は、スラサの侵寇を防ぎて、其名高し。然るに、十字軍起るに及び、小諸侯は其領土を賣却し、又は君

封建制及義騎制の衰微



主に奉還して、軍資を得、或は戦場の露と消えしもの多く、大諸侯は、王を壓して黨争を事とし、農民に重税を課して之を苦めしかば、封建制度は、漸く弛緩し、騎士の風も大に墮落し、小諸侯・騎士等は、旅客を道に要し、通行税と稱して之を劫掠するものあり。此間、獨り隆盛に赴けるを、各地方の市府となす。

市府の發達

市府の住民は、専ら製造・商業に従事し、帝國の保護を受け、特權を得て、自治を圖りしが、十字軍に際し、諸侯の地を買收して權利を増し、且つ、十字軍の爲め、新需要起りしかば、商業上の利を得ること甚だ多く、伊太利にてはヴェニス Venice・ミラノ Milan・ゼノア Genoa・フロレンス Florence 等、東洋貿易の利を籠斷し、其他、英・佛・獨・西等の市府は、互に聯合して諸侯に當り、就中、獨逸のハンザ同盟 Hanseatic League の如きは、數十市を

ハンザ同盟

〇

東帝國の隣民

聯合して帝國と雖も之を憚るに至れり。

#### 第四課 東歐の國情 蒙古の入寇

東帝國の近傍には諸種の蠻族横行し、ブルガリア Bulgaria 地方はブルガル人の據る處となり、カウカサス地方より黒海の北岸には、諸種の蒙古族の侵入せるあり、マジール人は匈牙利地方に據りて、皆、東帝國を苦めしが、九八八年、東帝コンスタンチン八世は、露主ウラヂミール一世 Vladimir と和を結び、ブルガリアを征服して一時勢を復せり。

其後、ノルマンは南より、セルジク・トルコは東より、蒙古族は北より、東帝國を蠶食し、第四十字軍はエンスタンチノーブルを陥れ、爲に帝國は四分五裂の状況に陥れり。

蒙古人の勃興

此時に當り、東北亞細亞の蒙古地方に、蒙古の一部族勃興す、



成吉思汗  
の西征

其酋長鉄木眞 *Temjin*、勇敢にして善く戦ひ、悉く近傍諸部落を統一し、一二〇六年、大汗の位に即き、成吉思汗 *Gingiskan* と稱し、更に西に向ひ、金、西遼、花刺子模を滅ぼして、中央亞細亞を平定せしが、一二一八年、親らサマルカンド *Samarkand* を陥れて回教國を滅ぼし、其將哲別を遣はして、南方露西亞を略せしむ。哲別は大に露軍を破り、露國東南の欽察 *Kiptschak* 地方を平定して歸れり。

次で鉄木眞死し、共に窩濶台 *Ogotai* (太宗) 立ち、其甥拔都 *Batu* をして西征せしむ。拔都は一二三七年、欽察諸部を降し、南露の聯合軍を破り、一二四〇年、キエフを陥れ、本軍は拔都自ら之を率ゐて匈牙利を侵掠し、別軍は海都 *Chaidu* 之を率ゐて波蘭より進み、ワールスタット *Wahlstadt* の原頭に、波獨の聯合軍を撃破して、本軍に合し、將に獨逸に侵入せんとす。此に於

拔都の西征

欽察國

て西歐諸國は大恐慌に陥り、法王は頻りに十字軍を奨勵せしが、會、窩濶台の計報到り、拔都等師を班へし、欽察汗國を建てたり。

察合台國

此より先き、成吉思汗の第二子察合台 *Jagatai* は、トルキスタ *Turkesan*、アフガニスタン *Afganistan* 等の地を得て、察合台國と稱し、其甥旭烈兀 *Hulagu* は波斯地方を征服し、一二五八年、バグダッドを陥れ、サラセンを滅ぼし、小亞細亞を略してイルカン國 *Ilkan* (伊蘭國) を建て、蒙古本國にては忽必烈 *Kublai* (世祖) 繼ぎ、一二七九年、支那帝國(宋)を滅ぼして元と稱したり。

元國  
イルカン

此に於て、蒙古は四大國に分れ、各征服地の宗教習慣を採用し、歐洲併呑の氣力を失ひたり。



### 第五課 英佛二國の交渉

系圖第五  
参照

英國にてはウリアム一世の征服後、國內に封建制度を布き、佛國に領地を有して、其大諸侯たりしが、一一五四年、プランタゼネト家 Plantagenet の祖、ヘンリー二世(一一五四—一一八九)の位に登るや、父母の遺領と、皇后の相續とにより、大に佛領の地を擴め、國內にては諸侯の權を削り、王權を強め、其二子リチャード一世(一一八九—一二九六)及びジョン(一二九六—一二九九)相次で位に即きしが、ジョンは佛王フィリップ二世の爲に地を奪はれ、法王インノセント三世と争を生じて破門され、遂に哀を請ひて、英國を法王の封土として受領することを許され、人民に重税を課せしかば、一二一五年、諸侯僧侶等、王に迫りて、舊慣に基ける大憲章 Magna Charta に署名せしむ。これ英國憲法の基礎となるものなり。

大憲章

英國議會  
の權興

ジョンの子ヘンリー三世(一二七二—一二九二)又無道なりしかば、人民、王に迫り、貴族、僧侶、及び、州市の代議士を召集して、議會 Parliament を開かしめ、英國下院の濫觴を爲し、エドワード一世(一二七二—一二九二)の時、上下兩院に分れ、爾後、英國の立憲政益、固定し、エドワード三世(一二七二—一二九二)は、アイルランド、スコットランド及びフールスを併せて、大に威を振へり。

佛國にては、ヒュー・ガベールの後、王權振はざりしを以て、フィリップ二世(一二八〇—一二九二)は、市府に特權を與へて諸侯を抑制し、英王ジョンの暗愚なるに乗じ、ノルマンディーを奪ひて、佛の王領となせり。爾後、名君相嗣ぎ、人民と結托して貴族を抑へ、學問、技藝を獎勵せしかば、王權大に發達せり。フィリップ四世(一二八五—一二九二)に至り、法王權をも抑へんとし、法王ボニフェイス八世 Boniface VIII と争を生じ、一三〇二年、貴族、僧侶及び平民の各階級代議士



佛國議會  
の初

法王權の  
衰微

英佛百年  
戰役

系圖第六  
卷照

を召集し、其贊助によりて、法王に抗したり、此れ佛國ステ三ー  
ツ議、ゼネラル *State General* の權輿なり。王は次で佛僧クレメン  
ト五世を立てて法王となし、アヴニオン *Avignon* に居らしめ、  
爾後、法王は七代、六十年の間、アヴニオンに在りて、佛王の命  
を奉ずる觀を呈し、法王權大に衰へたり。此に於て、英王は貢  
獻を絶ち、獨帝は其選舉に關して法王の干涉を謝絶せり。  
一三二八年、佛王チャーレス四世死して、男系絶え、ヴァロア家  
*Valois* の始祖たる、其從弟フリップ六世(一三三八—一三五〇) 嗣ぐや、英王エド  
ワード三世は、其母系の關係より、佛の王位を要求し、一三三  
七年、兵を率ゐてフランダール *Flanders* に上陸し、所謂百年戰役  
(一三三七—一四五三) の端を開けり。  
第一役に於て、英の陸海軍、到る處に佛軍を破り、佛王ジョン  
二世を虜にせしかば、一三六〇年、ジョンはアクトゥーアン *Agui-*

*ilane* を英に割きて和せり。其子チャーレス五世は、英國にてラ  
ンカスター家 *Lancaster* のヘンリー四世位を篡し、スコットラ  
ンドの獨立せる騷亂に乗じて、アクトゥーアンを恢復せり。  
第二役は、バーガンヂー公勢力を振はんとして、佛王チャーレ  
ス六世と隙を生じ、英王ヘンリー五世を誘ひしより生じ、一  
四一五年、アジネコート *Agincourt* の戰に、佛軍大に破れ、佛國  
の大半は英軍の占領する處となり、チャーレス六世次で歿し、  
チャーレス七世は僅にアンジュー *Anjou* 地方を守るに過ぎざ  
りき。時に農家の一少女ジャンヌ *Jeanne d'Arc* 義を唱へ、農民  
を奮起せしめ、チャーレスの據れるオルレアン *Orlean* の圍を  
解きしかば、義勇兵各地に起り、英軍を驅逐し、次でチャールス  
はバーガンヂー公と和し、一四五三年、大に英軍を破り、カレ  
ー *Calais* の外、悉く其地を復し、百年戰役全く終を告げたり。



英國薔薇  
戰役

百年戰役後、英國にては、ヨーク公リチャード、ランカスター一家に對して王位を争ひ、一四五五年、兵を擧げ、所謂薔薇戰役 War of Roses 始まり、二十年間の争闘の後、ヨーク家勝ちて位に即きしが、三世を経て、一四八五年、チードル家 Tudor の始祖、ヘンリー七世（一四八五—一五〇九）位に即けり。

### 第六課 文藝の復活

人心の活  
動

十字軍は、其初め、宗教熱心の爲めに起りしと雖も、東方の異人種に接して見聞を擴めたる結果は、却て宗教熱を冷却し、封建制度を廢頽せしめ、之に加ふるに、人口の増殖と、生産の振興とは、大に人心の活動を促がし、學者は概ね、従來の宗教的神秘主義なる、煩瑣哲學派 Scholasticism の學說に満足すること能はず、新說を求むること急にして、所謂、文藝復活 Renaissance

ヒューマン  
ニスト

Issance の機運を設けり。

當時、伊太利諸市は海外と交通を盛にし、希臘より學者を招きて學藝を講ぜしかば、遂に其地に、古語を研めて、直ちに古人の文章思想を明めんとする人道派 Humanism 起り、ヒューマン Dante（一二六五—一三三七）ペトラルカ Petrarca（一二三〇—一三七四）ボッカチオ Boccaccio（一三二三—一三七五）等の學者輩出し、古書を求め、古文學を研究し、其風、歐洲各地に傳播したり。

活版術の  
發明

此派は元來宗教に關係なく、其束縛を受けざるを以て、頗る歐人固有の敢爲、活潑の精神を鼓舞せしが、會、第十五世紀の中葉、獨逸マインツ Mainz の人、グーテンベルク Gutenberg といふもの、活版術を創めしより、論文の出版、古書の翻刻等に、非常の便益を與へ、智識を渴望せる、當時の人心を満足せしむることを得たり。



古美術の復興

古學の研究に伴ひて、古代の建築、美術の復活を致し、プラマ  
ンテ Bramante (一四四四—一五一四) は苦心して残存せる古建築を研究し  
て復古式を創め、彫刻、繪畫も宗教の臭味を帯びたる、陰鬱無  
氣力なる風を脱し、活動雄偉の風に富めるものとなり、彫刻  
には、ドナテロ Donatello・ミケール、アンゼロ Michael Angelo、繪  
畫には、レオナルド Leonardo ラファール Raphael 等の名手を出  
せり。

### 第七課 地理上の發見

中古の歐人は、地理上の智識極めて乏しかりしが、十字軍の  
結果は、漸くその東方に對する冒險の精神を高め、就中、マル  
コ・ポーロ Marco Polo は、一二七一年、郷里ヴェニスを發して、蒙古に  
至り、元の忽必烈に仕ふることに殆ど二十年、亞細亞の各地を

マル  
ポー

葡人の探  
検

跋渉して歸國し、其東方見聞記を公にして、頻りに東方諸國  
の繁榮を説くに及び、恰も、萎靡振はざる東西の商勢を挽回  
し、印度に至る新航路を得んとするは、歐洲一般の興望とな  
れり。

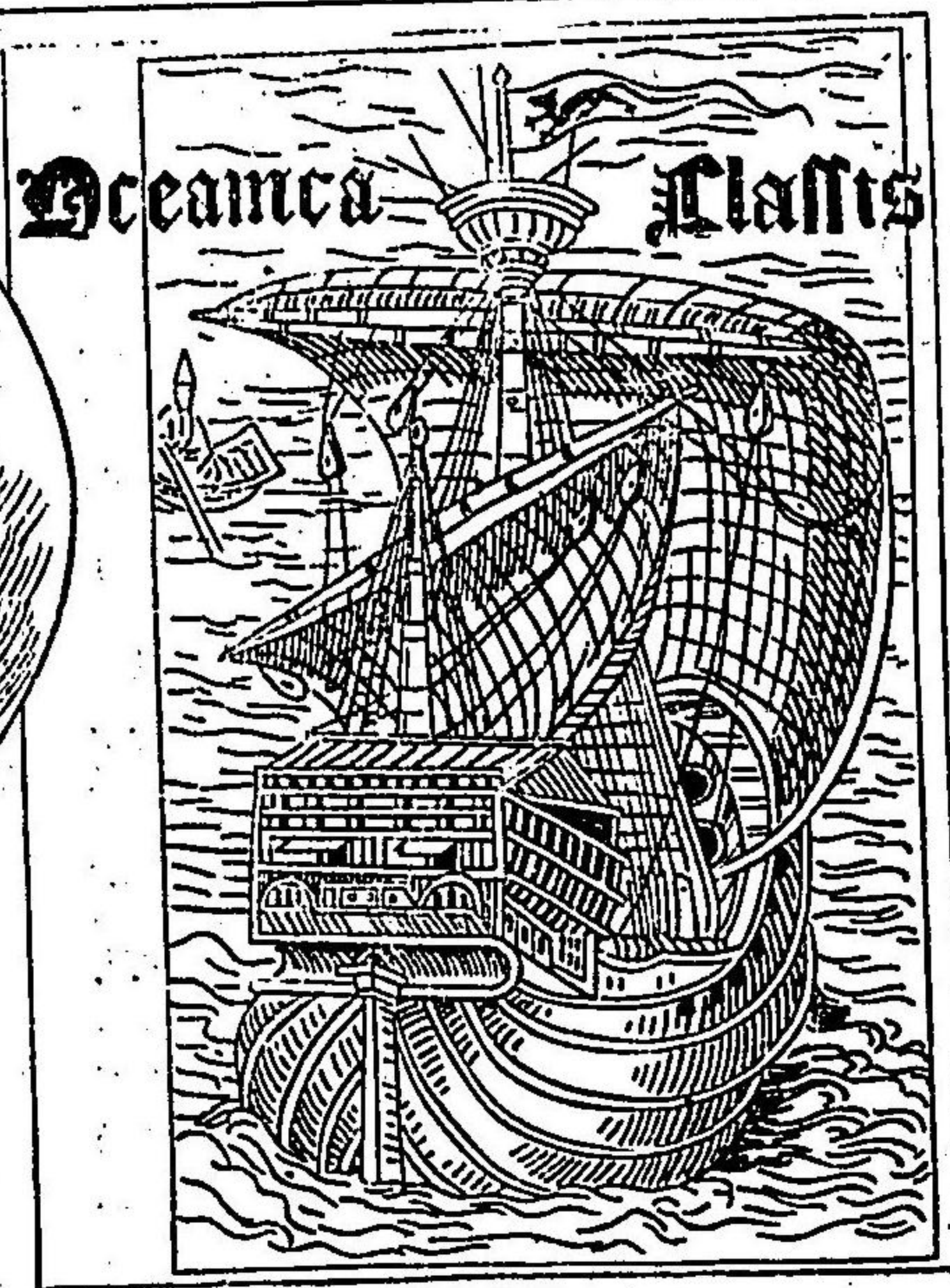
喜望峯の  
發見

當時、葡萄牙の王子、ヘンリーは最も熱心に航海術を研究し、  
恰も、支那より傳來せる磁針を應用し、天文を考察し、一四一  
五年以來、頻りに亞非利加の西海岸を探検し、大西洋上の諸  
群島を發見し、且つ南方の熱度も航海に堪えざる程の高度  
にあらざることを確めたり。ジョン二世、其遺志を繼ぎ、大に  
航海を奨勵せしかば、バートロミー、ディアズ Bartholomew Diaz  
は、一四八六年、亞非利加最南の岬に到りて、之を喜望峯 Cape  
of Card Hope と名け、後ち、エドマンド Emmanuel 王の時、ヴァス  
コ、ダ、ガマ Vasco da Gama 喜望峯を遶りて、一四九八年、始めて印



印度航路の發見

クリストフ・コロンブス



像のスアンコロ

度マラバール Malabar 海岸に達せり。

此航路の未だ明ならざる時、地球圓形の説出で、印度に到らんとするには、西航するを捷徑とすと説くものあり、伊太利ゼノアの人クリストフ・コロンブス Christopher Columbus 此説を主張し、諸國王に資を借らんとして成らず、遂にカスチル女王イサベラ Isabella に説きて採用され、一四九二年、船三艘を醸して西航すること八十六日、始

亞米利加發見

マゼランの世界一週

西人の新大陸殖民

めて西印度諸島に達し、其地を印度の一部と信じ、土人を印度人と名けたり。コロムバスは、其後二回の航海を企て、オリノコ Orinoco 河口に達し、西の殖民を留めて歸れり。一四九九年、フロレンスの人アメリゴ・ヴズプチ Amerigo Vespucci は南米に達し、遂に新大陸は亞米利加の名を得るに至れり。

爾後、東西の探検、殖民は益、盛にして、一五一九年、蘭人マゼラン Magellan は、はじめて世界一週を爲し、フェリピン群島を發見し、一五二二年、西人フルナンド・コルテス Fernando Cortes は、メキシコ Mexico を征服し、一九三七年、フランシスコ・ピザロ Francisco Pizaro は、ペルー Peru を攻略し、西班牙は頓に大殖民國となれり。葡人も偶然ブラジル Brazil を發見して領土となせり。



戰術軍器の變動

### 第八課 西歐諸國の中央集權

騎士の突貫は、中古の戰場に於て、最も有力なるものなりしが、第十四世紀の初より、端西人、一種の戰術及び武器を發明して、騎士に當り、屢、獨逸軍を苦めて其獨立を圖りしより、傭兵として各國に用ひられしが、次でサラセン人より鐵砲を傳へられ、拳銃、大砲等を戰場に用ひるに至りしかば、愈、騎士の力を殺ぎ、從て封建制を破壊するの動機となり。西歐諸國に中央集權の風潮を生じ、各國、皆其國家の基礎を確定せり。佛國にては、チャールズ七世、税法を改革し、常備軍を新設して、諸侯の抑壓を計り、ルイ十一世(一四六二—一四八三)は諸侯の男系絶ゆるものは、悉く其領土を收め、チャールズ八世(一四八三—一四九八)はブリタニー Britany の公主と婚して其地を併せ、第十五世紀の終りに、佛の王權確立して國勢大に振へり。

佛國の主權伸張

系圖第六 參照

英國の中央集權

西班牙王國の成立

葡萄牙の獨立

英國にては、薔薇戰役の結果、大諸侯の家は概ね斷絶し、ヘンリー七世は、星 皇 皇 ユート、オプ、スター、チムバー Court of Star Chamber を設けて、國事犯罪を裁判し、貴族を監督し、國會を開かずして租税を徴收せしが、國民は大亂の後なるを以て、敢て抗爭せず、王も亦盛に商業を獎勵して、英國の富強を致せり。西班牙にては、アラゴン王フ、イザナンドと、カスチル女王イサベラと結婚して兩國合一し、一四九二年、グラナダを滅ぼし、勢に乗じて諸侯の權を抑へ、法王より僧侶任命の權を奪ひ、大に王權を張れり。葡萄牙はもと、カスチルの屬邦なりしが、第十二世紀の始に至りて獨立し、ジョン二世(一四八二—一四九五)、エムマニエル一世(一四九二—一五二一)に相續ぎて商業殖民を獎勵し、貴族を壓服して富強に趣きたり。



獨逸のハ  
ブスブル  
グ家  
系圖第九  
參照

ゴ  
ール  
ア

マ  
キシ  
ミ  
ア  
ン  
一  
世

獨逸は、一二七三年、ハブスブルグ家のルドルフ一世(一二七二)選ばれて帝位に登り、大空位時代終りしが、其間、王權は大に衰へしかば、ルドルフは専ら秩序の回復を勉め、一二七八年已に反對するボヘミア王を破りて、奥地利を奪ひ、子アルバートを封ず、之を奥地利家の始とす。其後、諸侯と皇帝との争止まず、チャールズ四世(一二三六)に至り有名なるゴールデンブルGolden Bullを發して、七大諸侯の選帝權を承認せしかば、争亂は終りしが、王權は英佛の如く確固なる能はず、一四三八年以來、奥地利家の諸帝位に即きマキシミアン一世(一四九三)はバーガンディーの公主と婚して、ネザerlandをNetherlandを得、次で伊太利に於て、佛王チャールズ八世と争はんが爲め、帝國議會の請求を容れ、一四九五年、永久國內平和 Perpetual National Peace を令し、政治の圓滑を計りしが、帝の子、フリップが

瑞西聯邦

宗教の腐敗

西班牙の皇女と婚し、孫、フィチナンドが、ボヘミア匈牙利家の妹と婚せしは、將來奥地利家の強大を致せる原因となりぬ。  
瑞西諸州は、從來、奥地利の藩屬なりしが、一二九一年以來、其三州同盟して獨立を計り、屢、奥軍を破り、一四九五年に至り、十三州の同盟となり、マキシミアン帝をして、其獨立を默認せしめぬ。

第九課 法王權の衰頹 伊太利戰爭

法王は、佛王の爲に、アヴニオンに幽囚されし以來、其威信は、諸王侯を服するに足らず、加ふるに、第十四世紀は、地震、黒死、病、蝗害等の災厄、交、臻り、人心恐怖の極に達し、一三七六年、法王、グンゴリー十一世、羅馬に歸りしも、其腐敗墮落甚しく、各



宗教改革の企圖

地の大僧正は、隨意に法王を推薦し、同時に、二人の法王あるに至り、到底人心を慰籍すること能はざりしかば、宗教改革の聲、大に起り、一四〇九年には、ピサ Pisa に、一四一四年には、コンスタンス Constance に、一四三一年には、バーゼル Basle に、宗教會議を開きしも、徒らに、各派の黨争に終りて、改革の實を擧ぐることに能はず。

ジョン、ウイクリフ、ジョン、フス

此より先き、英國にはジョン、ウイクリフ John Wiclif あり、ボヘミアにはジョン、フス John Huss ありて、頻りに改革説を唱へ、地方の騒動を惹き起ししも、異端として刑せられ、遂に其目的を達すること能はざりき。

外交術

此時、西歐諸國に、中央集權の行はれたる結果、専ら權謀術數を以て、敵を倒す風を生じ、從て、外交術 Diplomacy なるもの起り、成るべく戦争を避け、從横の策によりて、事を遂げんとし、

伊太利諸市

公使を外國に派することも始まり、其中心は、伊太利にありき。

佛の伊太利争權

伊太利は、第十五世紀の末に當りて、北にミラン・フロレンス・ヴェニスあり、中部に法王領あり、南部にネーブルスありて、互に軋轢し、就中、フロレンスのメヂチ Medici 家は、文學美術を奨励し、外交術を逞くして、よく各國間の均勢を保ちしが、ミラン侯ルドヴ、ユ Ludovico 其兄を殺して、國を奪ふや、フロレンス・ネーブルスの聯合を恐れ、佛王チャールス八世を招きしかば、チャールスは、一四九四年、伊太利に入り、ネーブルスを略せり。ルドヴ、ユ、又其權力を忌み、獨帝西王及び法王と同盟して、チャールスに抗し、チャールスは、同盟軍を破りて歸國せしが、其子ルイ十二世、再び伊太利に入るに及び、獨帝マキシミリアン、一世は、之とミランを争ひ、英・西・ヴェニス等は、或は獨に、或



は西に黨して紛争し、法王ジュリアス二世は、外人を撃攘してその威權を恢復せんとし、英・西・獨と神聖同盟を結び、佛を苦めしが、一五一五年、佛王フランス一世立つに及び、ヴェニスと同盟し、ミランを奪ひ、翌年、西王フーデナンド歿して、幼孫チャールズ一世立ちしかば、マキシミアンも、獨力、佛に抗し難く、ミランの佛領たるを承認して、之と和せり。

伊太利戦争の結果は、悉く諸市を疲弊せしめ、法王は内政益腐敗し、獨逸の不統一を利用して、諸種の租税を徴し、驕奢の資となすのみなりき。

第十課 オットマントルコの寇 東羅馬の滅亡

東帝國の  
恢復

ニケトリア皇帝は、一二六一年、コンスタンチノープルを復し、

オットマ  
ン・トル  
コの勃興

セ、サリー・エビルスを平定し、國力を恢復せしが、其後、西北は、セルヴァ *Servia* の爲に侵され、東南はオットマントルコ *Ottoman Turks* の爲に侵されて、大に疲弊せり。

第十四世紀の初め、イルカン國(伊蘭)の衰ふるや、突厥人の一部落なる、オットマン、トルコの酋長、オスマン *Osman* (一二三〇—一二七五) 其羈絆を脱して、小亞細亞に獨立し、基督教徒の男兒を養育して作れる、ジャンザリー *Janizary* 軍を率ゐて、東帝國の地を蠶食し、アドリアノーブル *Adrianople* を陥れて都とし、其曾孫 *Bajazed I* (一二三九—一二八九) に至りては、マセドニア、希臘を征服し、一三九六年、ニコポリス *Nicopolis* に於て、獨佛及び匈牙利の騎士軍を撃破し、コンスタンチノープルを攻圍すること急なり。

帖木兒の  
勃興

時に、蒙古王の末裔帖木兒 *Timur* (タメルラン *Tamerlan*) 察合



アンゴラの戦

台國に起り、國內を統一し、欽察國を平定し、露西亞に入りて、抄掠を恣にし、兵を轉じて印度を攻め、ダリー *Dahli* 地方を略して、大帝國を作りしが、會、東帝より朝貢を約して、オットマントルコを退げんことを請ひしかば、帖木兒は大舉して、トルコを攻め、一四〇二年、アンゴラ *Angora* に於て、バジッゼッドと戦ひ、之を虜にし、東帝國は、一時難を逃れたり、帖木兒更に支那を攻めんとせしが、一四〇五年、病歿し、其大國も、忽ち瓦解せり。

東帝國の滅亡

トルコは、其後、モハメッド二世 (一四五二—一四八二) に至りて勢力を恢復し、波蘭・匈牙利の軍を破りて、再びコンスタンチノープルに逼り、一四五三年、終に之を陥れて、東羅馬帝國を滅ぼし、セルヴニア *Servia*、ボスニア *Bolnia*、アルバニア *Albania* を併吞し、クリム *Crim* を服し、一四八〇年には、伊太利のオトラント *Otranto*

露國の統

を陥れて、西歐を震動せしめしが、其翌年病みて歿せり。欽察は、帖木兒の歿後、獨立したれども、カザン *Kazan*、汗・クリム汗等の分離せるありて、勢振はず、露西亞のモスコウ *Moscow* 大公は、漸次勢力を得、一四六九年、カザンを服し、一四八〇年、欽察を滅ぼし、イヴァン四世 (一五三三—一五八四) に至り、遂に全露國皇帝と稱し、東帝國の學者僧侶は、多くモスコウに集まりて、希臘の文化を移植せり。第十四世紀の末、波蘭は、リスマニア *Lithuania* と合同して一王國となり、又東歐に威を振へり。



### 第三篇 近古史

#### 第一章 宗教上の改革時代

##### 第一課 宗教改革の發端 西佛の確執

中世に於ける法王の專權、僧侶の腐敗は、大に識者の憤慨する所にして、第十四世紀以來、ローマンズムの流行と共に、宗教の救済及び改革の企圖せらるること一再に止まらざりしが、偶、法王レオ十世が殿室建立の資を得んが爲め、贖罪インダルゼンス券 *Indulgence* を發賣するに及び、マルチン、ルーテル *Marlin Luther* 慨然起ちて之に抗せり。

ルーテルは、獨逸の一鑛夫の子なりしが、幼より神學を修め、ウイッテンベルグ *Wittenberg* 大學に神學を講ぜり。インダルゼンスの獨逸に發賣せらるるや、一五一七年、九十五條の意見書を

マルチン  
ルーテル

系圖第九  
參照

ウォルム  
ス國會

ウイッテンベルグ寺門に掲げて其非理を鳴らし、一五一九年には、ライプツィヒ *Leipzig* の公開討論場に於て、基督教義は一に聖書に據るべく、法王と雖も、全く過失なき能はざること、を明言せしかば、法王は、ルーテルを以て異端となし、之に破門を命ぜり。ルーテルは、一五二〇年、公衆の面前に於て、其破門狀を焼き棄て、諸侯伯の間に、賛否の意見紛然たり。

この前年、獨帝マキシミアン一世歿し、其外孫なる、西王チャールズ一世、墺地利の遺領を相續し、且つ佛王フランシス一世と、獨逸王の位を争ひて之に勝ち、チャールズ五世と稱せり。此に於て、チャールズは、墺地利、ネザールランド、サルチニア、ネーデルス・シネリ、西班牙及び其海外の屬領を併せ、勢甚だ盛なりしかば、佛王は、法王と結びて之に當らんとす。チャールズは法王の甘心を得んが爲め、一五二一年、ウォルムス *Worms* に



マドリッド條約

スバイエル國會 (1)

國會を開きて、ルーテルの説を異端とし、其徒を法律保護の外に措けり。サクソニー公フレデリック、乃ちルーテルを其居城ワルトブルグ Warburg に置き、聖書の翻譯を爲さしめき。此に於て、政治上宗教上の紛争、雜然として起り、佛王フランシス一世は、機に乗じて、ミランを圍み、チャーレスも兵を率ゐて伊太利に入り、一五二五年、パヴィア Pavia の戰に、佛王を虜にし、マドリッド Madrid 條約を結び、佛王をして、ネーブルス要求を棄て、且、バーガンデーを割かしめたり。然るに、佛王は國に歸るや、その約を破りて、法王及び英王ヘンリー八世と結び、チャーレスに抗せしかば、チャーレスは、一五二六年、スバイエル Spyer に國會を開き、一時、信教の自由を許し、人心を一致せしめて、伊太利に入り、佛軍を破り、一五二九年、カムブレイ Cambray 條約を結び、獨佛相互の要求を撤回せり。チャーレスは其

翌年ボロニア Bologna に於て、帝冠及び伊太利王冠を戴けり、此を法王授冠の最終となす。

### 第二課 宗教改革の進行

皇帝のかく、伊太利の事に忙はしく、宗教改革を抑壓すること能はざりしに乗じ、改革派は、頻りに活動して、急進・溫和の二派となり、クラウス、ストルヒ Claus Storch の唱へたる<sup>再洗</sup>アナバプチズム Anabaptism 派は、農民を煽動して寺院を抄掠し、亂暴甚しかりしが、次で諸侯の連合軍の爲に鎮定されたり。ルーテルは之に反し、溫和漸進主義を執り、新教の教會組織を確立し、チートニク、ナイト團體の長老アルバート Alert は、其地に宗教改革を行ひ、自ら普魯西 Prussia 公と稱し、波蘭の諸侯となり、新教は、漸次其基礎を固めたり。

ルーテル派の確立  
アナバプチズム



ス  
プ  
イ  
エ  
ル  
國  
會

後  
の  
ス  
イ  
エ  
ル  
國  
會

一  
部  
の  
ル  
テ  
ラ  
ン



此に於て皇帝チャー  
スは、一五二九年再び  
スバハエルに國會を  
開き、ウルムスの決議  
を勵行せんとせしが、  
新教徒は頻りに此に  
抗争せしかば、爾後、其  
徒をプロテスタント  
Protestant と呼ぶに  
至れり。時に、トルコは  
連りに、シリア・パレス  
ティン・埃及等を征服  
し、帖木兒の故地に起

ス  
レ  
イ  
マ  
ン  
二  
世

ア  
ウ  
グ  
ス  
ブ  
ル  
グ  
國  
會

シ  
ュ  
マ  
ル  
カ  
ル  
デ  
ン  
同  
盟

ニ  
ュ  
ル  
ン  
ベ  
ル  
グ  
宗  
教  
和  
議

波斯國を蠶食し、其サルタン Sultan スレイマン二世 Sleyman  
ニ 一五二〇は、一五二九年、匈牙利に侵入し、ウエナ Vienna を圍  
みしかば、獨逸の諸侯は、新舊教徒一致して皇帝を助け、トル  
コ人を撃退したり。

一五三〇年、皇帝は國會をアウグスブルグ Augsburg に開き  
て、新舊教徒の調和を計らんとせしが、新教徒はメランヒト  
ン Melancthon の起草せる、アウグスブルグ信條 Confession of  
Augsburg を提出して、舊教徒の排斥する處となりしかば、別  
にシュマルカルデン同盟 Schmalkaldic League を組織して、自衛  
の道を講ぜり。  
此間、スレイマンは、再び墺地利に侵入し、佛王フランシスは、  
伊太利を回復せんことを謀る。皇帝乃ち、一五三二年、新教徒  
とニュンブルグ Nuremberg の和議を結び、次回の宗教會議ま



クレスピ  
の和議

て、其宣敎の自由を許し、兵力を集めて、スレイマンを退け、チ  
ニス Tunis を撃ちて海賊を掃蕩し、又、英王ヘンリー八世と結  
びて佛王と戦ひ、一五四四年、遂に、クレスピー Crespy の和を  
結び、西佛、多年の紛争、局を結べり。

シマール  
カルデン  
戦役

帝は此より新敎諸侯を倒して、一家の繁榮を圖らんとせし  
かば、シマールカルデン同盟は、一五四六年、サクソニー公フレ  
ドリックを奉じて、戦を開きしが、翌年同盟軍大敗して、フレデ  
リック虜となり、皇帝は、モリス Mauris をサクソニー公とな  
す。されど法王は皇帝の處置を喜ばず、モリスも帝權の過  
大を恐れ、佛王ヘンリー二世と結び、不意に起りて帝を攻め  
しかば、帝は僅に身を以て逃れ、一五五五年、遂に、アウグスプ  
ルグの宗教和議に於て、新敎徒の信仰を許し、新舊兩敎徒の  
同權を認めたり。

アウグス  
プルクの  
宗教和議

系圖第九  
參照

帝は、今や、其計畫悉く畫餅に歸したるを見、其弟フーチナン  
ド一世を皇帝とし、子、フリッヅ二世を西王となして、位を退き、  
次で病歿せり。

### 第三課 宗教改革の普及及び其反動

ルーテルの改革説は、諸國に影響を與へ、瑞西には、ウルリッヒ、  
ツウイングリ Ulrich Zwingli 出でて、極端なる改革説を唱へ、且  
つ、其諸州の人民が、外國の傭兵となるを攻撃せしかば、黨争  
の極、戦争となり、一五三一年、ツウイングリ戦死して、其派の勢  
挫けしも、改革説は、漸次國內に行はれたり。

カルヴァ  
ン派

佛國にては、ジョン、カルヴァン John Calvin 改革説を唱へ、巴里大  
學の反抗に遇ひ、セネヴ、Geneva に逃れて、其地に、宗教的共和  
制を建て、一五三六年、全く法王より獨立することとなり、其



カルマー  
同盟

丁抹の改  
革  
瑞典の改  
革

省  
舊教の反

派は漸次、佛國、ネザールランド、蘇格蘭等に流布するに至れり。スカンデナヴィア諸國は、一三九七年以來、カルマー同盟を組織して、丁抹、瑞典諸國の合同成りしが、背反の傾向常に止まず、宗教改革説入るに及び、政治上にも變動を生じ、丁抹王フレデリック一世は、改革派を助けて、諸侯及び僧侶の權力を削減し、瑞典は、一五二三年、同盟を脱して、ガスタヴス、ヴァサ *Gustavus Vasa* 王位に即き、其新教徒を助けて、諸侯を抑制し、通商を奨励し、大に國權を伸暢し、其後、ガスタヴス、アドルフ *Gustavus Adolphus* に至り、獨逸の三十年戰役に關係し、ハブスブルグ家の勢を挫けり。

かく、新教の氣焰は、到る處に高く、舊教は一時殆ど絶滅せんとせしが、新教中にも、ルーターと他の派とは、全く連結を缺きて反目し、舊教は、法王以下の僧侶、大に反省する處ありて、

ゼスイ  
ト  
教會

フリップ  
二世

品行を慎み、教義を修正し、漸く、民望を恢復せしかば、宗教改革の反動、從ひて起り、殊に、西班牙の人、イグナチアス、ロヨラ *Ignatius Loyola* が同志と計り、仁惠、貧苦、服従の三大義務を約し、一五四〇年、法王の許可を得て、ゼスイト教會 *Jesuits* を組織せしは、舊教の力を恢復するに最も功ありき。

ゼスイト教會は、西王フリップ二世の獎勵を得て、西國を根據とし、身體強壯、才智衆に優れたるものを選び、嚴格なる教育を施して、盛に各地に布教せしめ、其宣教師フランシス、ザヴィール *Francis Xavier* の如きは、一五四二年、印度のゴアに赴き、一五四九年、我鹿兒島に來り、頻りに、近畿九州に布教せり。

#### 第四課 和蘭の獨立

西王フリップ二世は、父祖の廣大なる遺領を有して、勢盛なる



ネザール  
ンドの叛  
亂

に乗じ、舊教を勵行して、歐洲諸國に霸たらんとし、先づ、國會  
 Cortes を設け、傭兵を増し、宗教吟味所を創めて、内治の統一  
 を計り、一五七一年には、レバンント Lepanto の海戦に、土耳其軍  
 を粉碎し、英國の女王メリーと婚して、已の計畫を助けしめ、  
 佛王ヘンリー二世と戦ひて、數砦を奪ひしに、遂にネザール  
 ンドの反抗を招けり。  
 ネザールランドは、十七州より成り、早くより、製造商業盛にし  
 て、新教を奉じ、諸種の特權を有せしが、フロリッパは、其姉マーガ  
 レット Margareit を遣はし、舊教信仰を迫まり、特權を廢し、人民  
 の反抗するものは、兵力を以て壓せしかば、オレンジ Orange  
 侯ウリアム、率先して義兵を擧げ、海賊隊を組織して、西國の  
 商船を掠奪し、勢漸く盛なりしかば、フロリッパは、一五七八年、パ  
 ルマ公 Parma を其總督に任じたり。パルマは、南部諸州に舊

ウトレヒ  
ト同盟

教徒多きを見、自治を許して、歸降せしめしかば、ウリアムは、  
 其翌年、北部七州を誘ひて、ウトレヒト同盟 Utrecht Union を作  
 り、共和制を建て、一五八一年、獨立を宣言し、和蘭共和國と稱  
 し、世襲の總督に選ばれたり。  
 其後、ウリアムは、刺客の殺す所となりしが、其子モーリスよ  
 く戦ひ、英の女王エリザベス Elizabeth また兵を遣はして之を  
 援け、フロリッパの遣はしたる大艦隊インヴァンシブル、アーマダ  
 Invincible Armada を粉碎せしかば、フロリッパは、遂に力盡きて、其  
 獨立を默認するに至れり。  
 西班牙は、和蘭を失ひしが、一五八一年、葡萄牙王統絶ゆるに  
 及び、其殖民地と共に、之を併せ、殖民貿易の事業を東西に振  
 興せり。

葡人の東  
洋貿易

葡人は、此より先き、印度航路を發見するや、サラセン人、伊太



利人の商權を奪ひて、直接に東洋貿易を開き、一五〇五年、印度西岸に、カナノル Gananor 以下數市を得、要塞を築きて、其商館を保護し、一五一〇年、ゴア Goa に總督府を置き、次でマラカ Malacca を取り、一五一七年、始めて廣東に到り、支那と商業を開き、一五四二年には、我種子島に來れり、其後、支那より驅逐せられしが、一五五七年、明廷より、媽港 Macao (澳門) を永代借地とすることを得たり。

### 第五課 英國の宗教改革

ヘンリー八世 英國に於ては、ヘンリー八世、父に嗣ぎて立ち、トーマス、ウォルゼー Thomas Wolsey を用ひ、王權の擴張を圖り、初めは、宗教改革に反對し、皇帝チャーレス五世を援けて、佛國を破りしが、元來、英國の君民は、法王が種々の名義により、英國より、金錢財

英國教會の獨立

参照 第七

アングリカン教會

物を徴するを快しとせず、且つ、マドリッド條約以來、皇帝の權力増ししより、王は、其主義を一變せり。

王は、王后 カザリン Katharine (チャーレス五世の叔母) を離婚せんとし、ウォル

ゼーをして、法王の裁可を請けしむ。法王は、皇帝を憚りて容易に之を許さず、ヘンリー乃ちウォルゼーの官を免じ、一五三

三年、英國の裁判所をして、王后廢黜の事を決せしめ、アン、ボレン Ann Boleyn を娶り、一五三四年、國會の翼賛により、アク

ト、オブ、スープレマシー Act of Supremacy を發布し、王は、政教上、英國の主權者たることを宣言し、法王と全く分離せり。

一五四七年、エドワード六世、父に嗣ぎて立ち、大僧正クラムマー Cramer の輔佐により、ツウ、ングリの説によりて、教義

を修正し、議會の認可せる祈禱書 Book of Common Praer によりて儀式を定め、英國々教なるアングリカン教會 Anglican Church



エリザベス

John の基礎を立てしが、一五五三年、異母姉メリー立つや、舊教を信じ、新教徒を苦め、西王フリップ二世と婚し、佛と戦つてカレーを失ひ、大に國民の非難を招けり。

一五五八年、異母妹エリザベス繼ぐや、舊教徒は、蘇格蘭女王メリー、スチュアート Mary Stuart を立てんとせしが、メリーは、是より先き、專横なりしかば、其國人に逐はれ、エリザベスに依れり、エリザベス之を幽囚せしが、舊教徒、頻りに廢立を計るを以て、十八年の後、死刑に處せられたり。

英國海軍の發達

エリザベスは、舊教寺院を廢絶して、アングリカン教を確立し、西王フリップ二世の政略に反對して、和蘭の獨立を援け、一五八八年、西國のインヴァンシブル、アーマゴを粉碎してより、英國の海軍非常に發達し、新に、ヴァージニア Virginia の殖民地を設け、印度の貿易を開始し、航海殖民の業、大に隆盛に赴け

エリザベス朝の文學

り、之に反して、西國は此一撃の爲め、勢、大に衰へたり。エリザベスの治世は、また英國文藝の隆盛時代なり。シェクスピア Shakespeare は、絶妙の戯曲を出し、スペンサー Spencer ベン、ジョンソン Ben Johnson は、詩を善くし、ベーコン Bacon は、歸納法を唱へて、學術研究に、一新機軸を出せり。

### 第六課 佛蘭西宗派の争

ヒューゲノット

佛國には、カルヴン派の新教行はれ、其徒をヒューゲノット Huguenot と稱せり。フランシス一世及びヘンリー二世は、外に向つては、獨逸の新教徒を援けて、チャールス五世と戦ひしも、内に於ては、新教を嚴禁せしかば、不平の聲、稍、高からんとせる時、フランシス二世、チャールス九世、兄弟相嗣ぎて位に即き、母后カザリン政を攝せり。

系圖第七 參照



役  
ヒュ  
ット  
ゲ

時に舊教を奉ぜる、ギース侯 *Guis* 威權を弄せしかば、カザリ  
 ンは新教徒に寛典を與へて、之を抑へんとし、一五六二年、所  
 謂ヒューゲント戰役を生じ、新教徒は、コンデ公 *Conde* 及びコ  
 リニー *Coligny* を推して首領とし、英女王エリザベス之を援  
 く。キース侯は、西王フリップの援によりて、之に當りしが、カザ  
 リンは、フリップの國事に干涉せんことを恐れ、兩教徒を共和  
 せしめんとし、チャーレス九世の妹を、新教徒の首領にして王  
 室の支流なる、ナヴァール *Navar* 王ヘンリー、ブルボン *Henry*  
*Bourbon* に嫁せしめんことを約せり。然るに、カザリンは、コリ  
 ニーが、王の信任を得んとせるを忌み、之を暗殺せんとして  
 成らず、新教徒の復讐を恐れ、遂に王に迫りて、新教徒盡殺の  
 命令書に署名せしめ、一五七二年、セント、バーソロミュー *St*  
*Bartholomew* 祭日の夜を期して、コリニーを始め、數千の新教

セント、  
バーソロ、  
ミュー

虐殺

徒を虐殺せり。  
 此に於て、戰役再び開け、一五七四年、ヘンリー三世嗣ぎ、新教  
 徒を寛待して西王の野心を挫きしが、適王弟歿し、王また嗣  
 なく、王位はナヴァール王ヘンリーに歸せんとせしかば、ギ  
 ス侯は、西國と同盟して之を妨げんとせり、ヘンリー三世は、  
 其專權を憤り、之を暗殺し、已も殺されたり。ナヴァール王は、國  
 内の情勢を察し、親ら舊教に改宗して位に即き、ヘンリー四  
 世と稱し、西軍を破り、フリップ二世をして、其佛王たることを  
 承認せしめたり。

ヘンリー  
四世

系圖第十  
ナントの  
勅令

ヘンリー四世は、ブルボン家の始祖にして、大に財政を整理  
 し、内治を改良し、一五九八年、ナント勅令 *Edict of Nantes* を發し、  
 信教の自由及び新教徒の官吏となることを許ししかば、積  
 年の紛争、始めて局を結びしが、一六一〇年、ヘンリーは、兇徒



リセリユ

の爲に弒されたり。  
子、ルイ十三世嗣ぎ、母后政を攝し、奢侈に耽りて宮廷を紊し、新舊兩教の争、また生ぜんとせしが、リセリユ Richelieu 相となるに及び、新教の政權を奪ひて、王權を擴張し、財政を整理し、以て佛國の強盛を計れり。

### 第七課 三十年戰役

獨逸にては、フーデナンド一世及びマキシミアン二世、共に溫和の政令を布けるを以て、人民力を農工學藝に致し、コペルニカス Copernicus (一四七三—一五四三) ケプレル Kepler (一五七一—一六三〇) 等の天文學者を出ししが、ルドルフ二世即位の初め、舊教を保護せしより、漸く宗教上の軋轢を再びするに至り、マシアス帝は、帝權を強くせんとして、舊教徒なる従弟フーデナンドをボヘ

系圖第九  
參照

ボヘミア  
叛亂

ミア Bohemia 王となししかば、一六一八年、ボヘミア人叛旗を翻へし、爰に三十年戰役の端を開けり。  
フーデナンド次いて皇帝となり、フーデナンド二世と稱し、益、新教徒を迫害するや、ボヘミア人は、バラチネート選舉侯 Elector of Palatinate フレデリックの、英王ゼームス一世の女婿なるを恃み、迎へて之を王となせしが、英國の援兵到らず、帝は一六二〇年、西軍と共に、ボヘミアを平げ、バラチネートを奪ひたり。

クリスチヤン四世  
ガスタヴス、アドルフ

此時、丁抹王クリスチヤン四世は、ホルスタイン Holstein を領して、獨逸の一諸侯たりしかば、英、蘭二國を誘ひて、獨逸に侵入せしむ、却て帝の名將ワルレンスタイン Wallenstein の爲に敗られ、一六二九年、和を請ひ、新教は益、非運に向へり。  
時に、瑞典王ガスタヴス、アドルフ、ス大志あり、一は新教徒の



非運を救はんとし、一はハブスブルグ家を挫きて、  
 海岸の主權を握らんとし、佛相セリイと密約して、軍資を得、  
 一六三〇年獨逸に入り、向ふ所敵なく、將に新教徒の大聯合  
 を作らんとせしかば、帝はまたワルレンスダインを起たし  
 め、一六三二年、兩軍リッツェン Lutzen に激戦し、ガスタウス勝  
 利を得たれども戦死せり。

瑞典は、尙佛國より軍資を得て戦争を續け、ワルレンスダイ  
 ンは、西國の干渉を避け、獨國の統一を計らんとして、刺客に  
 殺され、次でフリーデナンド三世位に即き、西兵の力に依りて  
 戦ひ、佛はマザリン Mazarin、リセリイに次ぎて相となり、兵を  
 獨逸に出すに至りしが、遂に共に戦に倦み、一六四八年、ウエ  
 ストフリア Westphalia の條約を結び、此戦役の終局を告げたり。  
 此條約により、和蘭及び瑞西の獨立認可され、佛はメッツ Metz

ウエ  
 スト  
 フリ  
 ア  
 條約

地圖第二  
 十卷照

ツール Toul、ヴルダン Verdun の三市及びアルサス Alsace の  
 大部を得、瑞典は前部ポメラニア For-Pommerania の數市を得  
 て、獨逸國會に參列する權を與へられ、カソリック、ルーテル、及  
 びカルヴンの三派は、各同等の權利を得たり。  
 三十年戦役の獨逸に及ぼせる結果は、最慘憺たるものにし  
 て、著しく人口を減じ、都府零落し、農工商業衰へ、文學・技藝類  
 れたり、加之、帝國は、殆ど獨立せる無數の小邦に分裂し、皇帝  
 の命令漸く行はれざるに至れり。

獨逸の衰  
 頹

## 第二章 政治上の改革時代

### 第一課 佛國の隆盛 ルイ十四世

佛國は、リセリイの畫策効を奏し、獨逸を弱むることを得し



マザリンが、マザリン相となり、其遺志を継ぎ、幼王ルイ十四世(一六四三—一七一五)を輔け、ウエストフリアの條約によりて、獨逸に大讓歩を爲さしめ、尙ほ西班牙との戦を續け、一六五九年、ピレニース Pyrenees 條約によりて、西の國境及びネザールランドに於ける數市を併せ、ルイの爲に、西王フリップ四世の女を納れて、皇后となせり。

一六六一年、マザリン死するや、ルイ十四世は、自ら政務を視、大に人材を登用し、王權を確め、國威を輝かさんとせり。就中、藏相コルバート Colbert は、最も王の財政を整理して租税を軽くし、輸入税を重くして、國內の商工業を保護し、航海を獎勵し、海軍を擴張せり。王は又、文學・美術を獎勵せしかば、コルネール Corneille、モリエール Moliere、ラシーン Racine 等の文學大家を出せり。

ルイ十四世の親政

ネザールランド戦役

和蘭戦役

かくて、王は其充實せる國力を利用すべき期を窺ひ、一六六五年、西王フリップ四世歿し、子チャールス二世立つや、ルイは、王後の權利により、ネザールランドを要求し、出を兵して之を占領せり。和蘭は、英國及び瑞典と、三國同盟 Triple Alliance を結びて之に抗し、一六六八年、エークス、ラシヤ、ベルの條約により、ルイをして、僅にネザールランドの數市を得るに止めしめき。

ルイは、深く和蘭の妨害を惡み、英國及び瑞典に説きて、已と結ばしめ、一六七二年、和蘭に侵入せしが、オレンヂ公ウリアム三世、國人を激してよく防ぎ、且つ再び英國・瑞典を誘ひ、獨西と共に、同盟せしかば、一六七八年、ニメグエン Nimeguen の條約により、ルイは、其侵地を還し、ストラスブルグ Strasbourg 其他二三の要地を獨逸より奪へり。



バラチネ  
ト戦役

其後、バラチネト選挙侯の歿して男嗣なきや、ルイは、弟フ  
リップの夫人の相續權を主張し、一六八八年、兵を遣はして、其  
地を占領す。此年、オレンヂ公ウリアムは、英王の位に即き、諸  
國に説きて、殆ど全歐の大同盟を結びて、ルイに敵し、海陸の  
諸處に戦ひしが、一六九七年、リスウク *Riswick* の和議成り、列  
國皆其侵地を還し、ルイは、ストラスブルグの領有を確め、ア  
ルサス地方を得たり。

ルイ十四  
世の失敗

かく、ルイは、歐洲列國と抗して、よく國威を損せざりしと雖  
も、先きに、ナントの勅命を發して、新教徒を迫害したる爲め、  
勤勉なる新教徒の商工業者は、多く英蘭に逃れ、佛國の商工  
業大に衰へ、ルイの勢力も其根底大に動き、且つ其朝廷の華  
奢は極度に達し、官臣威を弄して、人民重税に苦みしかば、漸  
く他日の亂階を爲せり。

系圖第八  
參照

チャー  
レス一世

### 第二課 英國兩度の革命

英國にては、一六〇三年、エリザベス女王歿し、蘇格蘭王ゼー  
ムス六世入りて嗣ぎ、英蘇の合同始めて成り、ゼームス一世  
(一六〇三)と稱し、スチュアート家の祖となりしが、王權の神授  
*Divin Right of Kings* を唱へて、議會と衝突し、大に民心を失へ  
り。其子チャーレス一世(一六二五)は、議會を解散すること兩度、議  
會は、權利請願書 *Petition of Right* を提出して、之に反  
抗せしかば、王は、遂に議會を開かざること十一年、任意に租  
税を課して奢侈の資とし、又ピューリタン教徒 *Puritan* を迫害  
せしかば、ピューリタン教徒は、多く亞米利加に逃れ、人心恟々  
たり。

偶、蘇格蘭の新教徒反せしかば、王は止むを得ず、一六四〇年、  
議會を召集して、軍資を支出せしめんとせしが、議會は、王を



長期議會

攻撃するのみ、其要求に應ぜざるを以て、忽ち之を解散し、新議會を召集せり。これ所謂長期議會 Long Parliament (一六四〇) にして、極力王に反抗し、王は兵力によりて、議員を逮捕せんとして能はず、國內にカヴルリー Cavalries (王黨) 及びラウンド、ヘド Round Heads (議院黨) の二黨を生じて、内亂となり、初め王黨勝ちしが、オリヴァー、クロムウェル Oliver Cromwell 出でて、議院黨を率ゐるに及び、王軍破れ、王は蘇格蘭に奔り、同國人に捕へられて、英國に送らる。

第一革命

英國共和政

クロムウェル

時に、議院黨は、又プレスビテリアン Presbiterian (立憲黨) インデペンデント Independent (共和黨) に分れて争ひしが、クロムウェルは、兵力を以て、プレスビテリアン黨を壓し、王を裁判して、一六四八年、之を死刑に處し、共和政府を組織せり。蘇人は、チャーレス一世の子、チャーレス三世を奉ぜしが、クロム

ウェル討て之を佛國に奔らしめ、自ら共和政の保護者となり、武斷政治を行ひ、舊教徒を壓し、奢侈遊技を禁じ、蘭英二國を

クロムウェルの像



四世の勢力を助長するのみなりしを以て、國民は、漸く武斷政治を厭ふに至り、一六五八年、クロムウェル病歿し、子リチャード

合して一大商業國となさ

んとて和蘭に交渉し、其聞

かざるや、一六五一年、航海

例、ゲーション、ナクト Navigation

Act を發布して、蘭人の航

海貿易を妨げ、遂に戦争と

なりて、大に其陸海軍を破

り、次で佛國と結びて、西班

牙を破りしが、却てルイ十



王政復古  
Restoration

ト嗣ぎ、尋て職を辭するや、チャールズ二世(一六八〇)を迎へて、王位に即かしめ、王政復古せり。

チャールズ二世は、素行脩まらず、佛王ルイ十四世の賄賂を受けて、其政略を助け、且つ之に倣ひて、王權の神授を實行せんとし、議會は、また、王を助けんとするトーリー黨 Tories と、民權を主張するホイッグ黨 Whigs とに分れしが、遂に一六七三年、憲法テスタメント法 Test Act を通過して、舊教徒の官吏となるを禁止、一六七九年、人身保護ハベアス、コーパス、法律アクト Habeas Corpus Act を通過し、濫りに人民を逮捕するを禁じたり。

然るに、ゼームス二世(一六八五)位に即くや、舊教を復興せんとして、テスタメント法を無視し、佛王の政略を傍觀して、已も之に倣はんとせしかば、ホイッグ、トーリー兩黨共に、國難の生ぜんことを憂ひ、ゼームスの長女、メリーの夫なる、オレンヂ公ウイ

系圖第八

名譽革命

リアムを迎へて王となさんとし、一六八八年、ウリアムは、兵を率ゐて、突然英國に上陸し、ゼームスは、佛國に逃走せり。議會は即ちウリアム三世(一六八八)及びメリー(一六八九)を共同の君主となせり。

ウリアムは、専らホイッグ黨の人士を登用して、政黨内閣の端を開き、ビル、オブ、ライト Bill of Right を發布して、國民及び議會の權利を明にし、佛國に抗して其侵略を妨げ、且つ其援助によりて復位を謀れる、ゼームス二世を破り、遂に佛王をして、己の英王たる權利を承認せしめたり。

### 第三課 西國王位繼承戰役

塊地利の優勢

當時、獨帝レオポルド一世(一七〇七)は、三十年戰役の傷痕を回復せんことを勉めしが、其領土塊地利の土耳其に接せる爲



西國繼承問題

系圖第十  
一参照

め、絶えず交渉を起し、遂に土境の戦争となり、一六九九年、大に土を破りて、匈牙利全部及びトランシルヴァニア Transilvania を割かしめしかば、大に其勢力を増せり。

偶、西王チャーレス二世(一六六五-一七〇〇)嗣なかりしかば、佛獨は、共に其女系の關係により、ルイ十四世は、其孫フリップを、レオポルド一世は、其次子チャーレスを、西王の嗣となさんとし、列國は、其國力平均を失はんことを恐れ、バウリアの公子を推せり。然るに公子早く歿し、チャーレス二世は、一七〇〇年、フリップを嗣となすことを遺言して死し、フリップは西王となりて、フリップ五世と稱せり。茲に於て、西國王位繼承戦役起り、英國、主として獨帝を援け、和蘭及び獨逸聯邦之に加盟せり。

一七〇二年、英王ウリアム三世歿し、アン(一七〇二-一七〇四)立ち、マルボロー Marlborough 公、ホッグ内閣を組織して之を輔佐し、一七〇

マルボロ公

佛國の苦戦

ウトレヒト條約

四年、自ら兵を率ゐて大陸に入り、境將サヴァイ Savoy 公ユージン Eugene と共に、佛軍をブレンハイム *Blenheim* に破る。翌年、レオポルド一世歿し、ジョセフ一世(一七〇五-一七一一)繼ぎ、益、佛軍を苦め、伊太利、ネザールランドを占領せり。ルイ十四世は、今や國帑空乏し、商工業衰頽して、恢復の力なきを見、大に讓歩して和を求めしも、同盟諸國之を許さず、益、兵を進めしが、一七一〇年、英國にてマルボロー公信任を失ひ、トリーリー内閣之に代り、平和を主張し、翌年、皇帝ジョセフ一世歿し、弟チャーレス六世(一七一一-一七四〇)繼ぎ、獨逸の合同せんとする恐を生ぜしかば、形勢一變し、一七一三年、列國と佛との間に、ウトレヒト *Utrecht* の和議成り、西佛の合同せざることを約して、列國はフリップ五世の西王たることを認め、英國は、西よりジブラタル *Gibraltar*、ミノルカ *Minorca* を得、佛よりハドソン灣 *Hudson Bay* 地方、ニュー



フアウンドランド New Fundland 等を得、和蘭は西領ネザール  
ンドの數市を得、ブランドンブルグは普魯西王の稱を得、サ  
ヴァイ公も王號とシシリイとを得たり。翌年西獨間に和議成  
り、獨はネザールランド・ネーブルス・ミラン・サルチニアを得た  
り。

戦後の佛國

系圖第十

戦後、佛國にては一七一五年、ルイ十四世歿し、幼曾孫ルイ  
十五世(一七二五)嗣ぎ、オルレアン公 Orléan 攝政となり、朝廷は  
豪華腐敗を極め、貴族僧侶は平民を苦め、戦後の慘狀殊に甚  
しきにも拘はらず、王は安逸に耽りて、國勢恢復に意なく、ル  
イ十四世の雄圖、全く畫餅に歸せり。

英蘇の合同

之に反して、英國は、アンの治世中、一七〇七年、英蘇の合同  
成り、大ブリテン Great Britain と稱し、一七一四年、ハノーヴァー  
Hanover 選舉侯ジョージ一世 George I (一七二七)入りて王となり、ハ  
〇

系圖第八

西王プロヒ  
世

ノーヴァー家の始祖となり、其末年にはウルポール Walpole を  
用ひて政治を一任し、文學・科學を奨励せしかば、ポープ Pope  
アチソン Addison スウフト Swift 等の文豪、ニートン Newton ロ  
ック Lock 等の科學者出でたり。

西班牙は東西の領地を失ひたるのみならず、此より先き、  
一六六八年、葡萄牙の獨立せるありて、其國勢大に衰へしか  
ば、フェリッパ五世は、銳意宿弊を除き、商業・製造を奨励し、一七一  
七年、シシリイ・サルチニアを奪はんとせしが、列國の干涉に  
よりて果さず。此時、サヴァイイはシシリイとサルチニアとを交  
換し、爾後サルチニア王と稱せり。

### 第四課 歐洲諸國の東西殖民

第十六世紀の東洋貿易は、主として葡萄牙の主る處なり



蘭人の東洋貿易

しが、第十七世紀に和蘭人の獨立するや、葡西の殖民地を侵略せんとし、一六〇二年、東印度會社を創設し、一六一八年、ジャバ島 Java の バタヴィア Batavia に總督府を置き、一六四〇年にはマラカ Malacca を取り、一六五八年、セーロンより葡人を逐ひ、一六五〇年、喜望峰に、ケープ、コロニー Cape Colony を設け、遠く支那日本に於て、葡人と競争し、一時臺灣を占領せしが、一六六一年、鄭成切の爲に逐はれ、日本に於ては、徳川幕府の間、其商利を獨占せり。

蘭人は、また一六二一年、西印度會社を創め、ブラジルの過半を領せしが、葡國の獨立するに及び、償金を得て之を還せり。

蘭人の東西殖民は、其目的、主として通商にありしかば、其根據固からず、且つ本國に於ては、七州殆ど獨立の姿を爲し、

蘭人の衰勢

黨派の軋轢盛にして、敏活の政治を行ふことを得ず、永く佛王ルイ十四世と争ひて、國力疲弊せしかば、其商利は、漸く英人の爲に奪はるるに至れり。

英佛二國は先づ印度に着眼し、當時蒙古帝國の衰へて諸侯の割據せるに乗じ、其希望を達せんとし、英人は一六〇〇年、東印度會社を創立し、蒙古帝より貿易の特許を得て、サラト Surat を開き、一六一三年、我長崎平戸にも來りしが、蘭人の妨害に遇ひて利を失ひしかば、専ら力を印度に用ひ、一六三九年にはマドラス Madras を、一六六一年にはボムベー Bombay を一六九九年にはカルカッタ Calcutta を得たり。佛も一六七二年にチャンダナゴル Chandernagor を一六九九年には、ボンデシグリー Pondichery を得たり。

新大陸に於ては、英人は一五三六年、ニュー・フランスに殖民

英國の印度拓植

佛國の印度拓植



英人の亞米利加殖民

佛人の亞米利加殖民

し、盛に漁業の利を得しかば、一六〇六年ロンドン會社を建て、南ヴァージニア *South Virginia* を經營し、ブリマウス *Plymouth* 會社を建て、北ヴァージニア・ニュー・イングランド *New England* (後のニュー・ヨーク及びマサチューセッツ地方) を拓殖し、チャールズ一世の時、ペーリタム教徒の多く住せるより、北米殖民地は頗に盛大となれり、佛人は、始め西人の爲に妨げられしが、第十七世紀の初めに至り、アカチア *Acadia* (後のノヴァ・スコチア) クエベック *Quebec* ニュー・フランス *New France* (後のカナダ) に殖民し、ルイ十四世の初め、コルバートは最も殖民を奨励し、ミシシッピー河 *Mississippi* の兩岸に、ルイジアナ *Louisiana* を創めたり。

第五課 露西亞の勃興

露西亞は、一五八四年、イヴァン四世歿して、其統絶へしより、黨

系圖第十一卷

ピートル大帝の内政改良

ピートル大帝の像



ナラダニ於ケル大帝の強壯室

争起りて、一時は波蘭の爲めに滅ぼされんとせしが、ロマノフ家 *Romanoff* の祖、ミカエール *Michael* 起りて波蘭人を驅逐し、一六一三年、帝位に即き、數世を経て、ピートル大帝 *Peter* (一六八二—一七二五) 位に即き、一六九五年、土耳其を討ちてアゾフ *Azov* を奪ひ、次で親ら蘭・英諸國に遊び、造船術其他の



波丁露の同盟

技術を修め、數多の學者、將校、技術家等を雇ひて國に歸り、西歐の文物に則りて、學校を開き、工業を起し、曆法を改め、陸海軍を整備し、自ら希臘加特力教首を兼ねて、政教上の主權を握り、文武百官の監督を嚴にし、以て國政を一新し、バルチック海を制して、北歐に雄飛せんことを期せり。

北方戰役

此より先き、波蘭は選王制となりし爲め、貴族等、黨を立て、相争ひしかば、國力弱く、丁抹は庸主相續ぎ、共に、常に瑞典の爲に苦められしかば、一六九七年、チャーレス十二世、瑞典王となり、年尚幼なるに乘じ、波蘭王アウガスタス二世、丁抹王フレデリック四世は、共にピーターと結び、瑞典を討ちて、其領土を分割せんとし、一七〇〇年、所謂北方戰役の端を發せり。

チャーレス十二世

チャーレス十二世は非凡の將才あり、直ちに丁抹に入りて之を破り、和を請はしめ、轉じて露國に入り、ナルヴァ、Narva を圍

めるピーターの軍を粉碎し、勢に乗じて波蘭を畧し、一七〇四年、アウガスタス二世を廢し、レスチンスキー Leszinski を選立せしめたり、ピーターは此間を利用して、普魯西と結び、フィンランド Finland を取り、セント、ピータースブルグ St. Petersburg を經營し、バルチック海岸の主權を固めたり。

既にしてチャーレスはモスコウを衝かんとし、一七〇九年、ブルトワ Puowa に於てピーターの爲に破られ、逃れて土耳其に走りしかば、ピーター悉くバルチック東岸の地を併せ、アウガスタス二世は波蘭の王位に復し、丁抹も亦シュレスウ、グSchleswig を畧せり、次でチャーレスは土耳其を煽動し、露と戦はしめしが、ピーターはアツフ還附を約して、之と和せしかば、チャーレスは急行國に歸り、丁抹より諾威を奪はんとして戦死せり。



ストックホルム條約  
ニスタット條約

波蘭繼承戰役

瑞典乃ち一七一九年ストックホルム Stockholm の和議により、前部ポメラニアを普魯西に與へ、代償金を丁抹に與へて、其侵地を恢復し、一七二一年ニスタットの和議により、バルチック東海岸を露西亞に與へて、北方戰役の局を結びしが、瑞典の國勢、此より振はず、露國は新教の力益、加はり、爾後、頻りに波蘭の國事に干涉し、西比利亞拓殖、土耳其縮小の企圖、着々歩を進めたり。

ピーター大帝より三傳して、一七三〇年、其姪アンナ立つや、會、波蘭王アウガスタス二世歿し、其繼嗣に關して争を生じ、國人はレスチンスキーを立てんとし、佛王ルイ十五世は之を援け、アンナは、獨帝チャールズ六世と共に、アウガスタス三世を立てんとし、終に歐洲の大亂となりしが、一七三八年、ウエナの條約により、レスチンスキーは王位の要求を棄て、死

後、佛國に合併さるべき約を以て、ロレイン Lorraine 公となり、墺はネーブルス・シシリイ及びエルバ Elba を西に譲り、パルマ Parma ピアセンサ Piacenza を得て和を結べり。

### 第六課 普魯西の勃興 奧國繼承戰役

フランデンブルグは、第十七世紀の初め普魯西を併せて、獨逸の選舉侯たりしが、フレデリック、ウイリアムの時、大に其富強を増し、其子フレデリック一世は、(一六八八-一七一三)西國繼承戰役に獨帝を助けたる功を以て、普魯西王たることを許され、其子フレデリック、ウイリアム一世(一七一三-一七四〇)は勤儉尙武を國是とし、教育の普及及び實業の發達を圖り、其散在せる領土を聯絡擴張せんとし、ピーター大帝と結び、瑞典より前部ポメラニアを取り、一七四〇年、太子フレデリック二世(一七四〇-一七八六)立つや、天資英

フレデリック大王



プ  
ラ  
グ  
マ  
チ  
ツ  
ク  
、  
サ  
ン  
ク  
シ  
オ  
ン  
マ  
リ  
ア  
、  
テ  
レ  
サ

邁にして、父祖三世の遺業により、大に雄飛を試みんとせり。此より先き、獨帝チャーレス六世嗣なきを以て、前途を憂へ、其家憲プラグマチック、サンクシオン Pragmatic Sanction を發し、奧地利の全領(匈牙利王國、ボヘミア王國、奧地利、大公國及び奧地利他家其他の領地)を、其女マリア、テレサ Maria Theresa に與へんとし、列國の承認を得たり。然るに、一七四〇年、帝死し、マリア、テレサ其遺領を繼ぎて、匈牙利女王と稱するや、列國は此機に乗じて、各其慾望を遂げんとし、バウリア侯チャーレスは、帝位及び奧領を、普王フレデリック二世は、シレシア Silesia を要求せり。此に於て、佛はバウリアと結び、英は奧を援け、奧國繼承戦争起る。

繼承戰役の進行

一七四一年、フレデリック二世は、突然、兵を率ゐてシレシアを占領し、翌年チャーレスはボヘミアを奪ひ、選ばれて獨帝チャーレス七世(一七四三—一七四五)と稱し、普、佛と共に奧軍を破れり。マリア、テ

ド  
レ  
ス  
デ  
ン  
條  
約

レサ乃ち匈牙利に逃れ、人民の同情を得、フレデリックにシレシアを與へて之と和し、大に佛及びバウリアを破りしが、フレデリックは奧の勢を恢復せんことを恐れ、再び佛及びバウリアと同盟し、奧軍を破りしが、一七四五年、チャーレス七世死し、マリア、テレサの夫フランシス一世(一七四五—一七六五)選ばれて帝位に即ぐや、ドレスデン Dresden 條約によりて、普のシレシア領有を確め、フランスの皇帝たることを承認せしめぬ。

エ  
ー  
ク  
ス  
、  
ラ  
、  
シ  
ヤ  
ベ  
ル  
條  
約

此時、英國はゼームス二世の孫が、王位を奪はんとする亂を生じて、兵を收めしかば、佛は西を誘ひ、奧領伊太利を侵ししが、一七四八年、エークス、ラ、シヤベルの和議により、列國はフランスの獨帝たること及びハノーヴァー家の英王たることを認め、奧はバルマピアセンサを西國王子フリッパに與へて、伊太利王と稱せしむ。



第七課 七年戰役 英佛殖民地之爭

英の復仇  
計畫

フレデリック二世は、戰後益々軍隊を訓練し、都市の特權を廢し、農商を獎勵して他日に備へたり。マリア、テレサは普國に倣ひて行政を改革し、實業を興し、陸軍を整へ、以て普國に報ゆる處あらんとし、私に露の女帝エリサベス(一七四一—一七六四)、波蘭王アウガスタス三世と對墺同盟を結び、英佛の一を誘はんとせり。會、英佛の兩國人が、其殖民地ニューファウンドランドに葛藤を生ずるに及び、英は佛のハノーヴァー占領を恐れて、普と同盟せしかば、墺は佛に説きて同盟に入らしめんとせり。此に於て七年戰役起る。

七年戰役

フレデリック二世は、機先を制して、一七五六年、突然サクソニヤを占領し、英より軍資を得て、連戰、墺露の軍を破りしが、一七五六年、墺露は大舉して、クンネルスドルフ *Kunnersdorf* に

老ビット  
Pitt the  
Elder

フレデリックを破りしより、フレデリックは衆寡敵し難く、僅に防禦の位置に立ち、一七六一年、英相ビット *Pitt* 内閣を退きてより、軍資の供給絶え、フレデリックは一時死を決するに至れり。然るに、一七六二年露のエリザベス歿し、ピーター三世(一七六二—一七九六) 繼ぎ援兵を班さん(一七六二—一七九六) 六) 立ち普と和して之を援け、形勢一變せしが、間もなくピーター弒に遇ひ、皇后カザリン二世(一七六二—一七九六) 繼ぎ援兵を班さんとするに及び、フレデリックは之に先んじて、大に澳軍を破れり。

英佛殖民  
地の戰爭

デュー  
レー

此より先き、英佛の殖民地は、亞米利加に於ては境界判然せず、印度に於ては競争烈しかりしかば、墺國繼承戰役以來、東西の殖民地も戰を開き、初めは佛の勢優り、其印度總督デューレー *Dupleix* は、遂にマドラスを略せしが、大陸の和議と共に、其地を還せり。七年戰役起るや、殖民地の戰亦開け、佛は初



め其海軍を放ちて、ミノルカ島を占領せしも、後、専ら力を大陸に用ひ、英はフレデリックに大陸を一任し、全力を殖民地に注ぎ、一七五九年、クエベックを陥れ、カナダ Canada を略し、西印度の佛領を奪へり。印度に於ては、デュープレー、初めデッカ Deccan 地方に氣焰を擧げ、印度諸侯と結び、カルカッタを陥れしも、英人クライブ Clive 兵を起して、大に英軍を破り、デュープレーの召還されたるに乗じ、ベンガル Bengal を占領し、ボンデッリーを奪へり。

巴里條約

此に於て、佛國力盡きて和を請ひ、一七六三年英佛の間に巴里の和成り、英は佛よりカナダ、ケイプ、ブレントン島 Cape Breton、グラナダ島、セネガル Senegal を得、西よりフロリダ Florida を得て、キューバ Cuba を還し、西は佛よりルイジアナを得、佛は奥より兵を撤することを約せしかば、奥も獨力、普に當り難

フベルツブルグ條約

く、同年、英、奥の間にフベルツブルグ Huberzburg の和成り、各邦の境域を悉く舊に復することとし、フレデックは選舉侯として、マリア、テレサの子、ジョセフ Joseph に投票することを約して、シレジア領有を確めたり。此戦役によりて英國は大殖民地を得て、益、海上に雄飛し、英國は直接に得る處なかりしも、其實力は各國の認むる處となりて、奥、露と伍するに至りしが、フレデリックは、また文學、美術を奨励し、クロプストック Klopstock、レッシング Lessing 等の文學大家を出せり。

第八課 露西亞の外交及び拓殖

露の女帝カザリン二世は豪偉の天資あり、ピーター大帝の遺志を継ぎ、波蘭の衰頹に乗じ、其地を併せんとし、一七六三

カザリン二世



第一回波蘭分割

年、アウガスタス三世の歿するや、己の寵臣を其王とし、之を屬國視せしかば、貴族等之に反抗し、カザリンの兵を出すに及び、土耳其と連合せり。カザリンは兵力を以て波斯を威壓し、土耳其を攻めてクリミアを奪ひ、其海軍を燒棄せり。獨帝ジセフ一世、英王フレデリック二世は、其飽くなき野心を恐れ、波蘭分割を主張し、一七七二年、遂に三國間に、第一回の分割を行ひ、各國境に近き地を奪ひたり。

バヴァリア繼承戰役

此時、ジセフ一世は、銳意行政の改良を計り、一七七七年、バヴァリア公マキシミアンの歿するや、其一部を占領せしかば、フレデリックは、之に反對し、バヴァリア繼承戰役起りしが、一七七九年和を結べり。次で、ジセフはカザリンの土耳其侵略に反對せざるを約して、英王と絶たしめ、バヴァリアと、墺領ネザーランドとを交換せんとせしかば、フレデリックは獨逸侯と、

王公同盟

露の西北利亞拓殖

コッサク人

ネルチンスク條約

王公同盟を結びて之に當らんとせしが、幾もなく、兩人相次で死し、僅に事なきを得たり。

西北利亞の西北は、もと蒙古種の住地なりしが、イヴァン四世は、南露に住せるコッサク人 *Cossacks* の酋長イルマク *Irmak* をして、一五七八年、悉く之を征服せしめしより、コッサクは連年東方を探検し、一六三二年にはカムチャツカ *Kamtschaka* に達し、イルクツク *Irkutsk*、ネルチンスク *Nertschinsk* (厄布楚) 等を創め、一六四九年には黒龍江沿岸を征服し、アルバツン *Albain* 城(雅克薩)を築き、屢清軍と戦ひ、勝敗ありしが、一六八五年、清軍アルバツンを陥れたり。ピーター大帝は大使を派して、一六八九年、清使とネルチンスクに會し、通商條約を結び、境界を定めたり。カザリン二世の時に及びては、我漂民のカムチャツカに至りし爲め、交渉を起し、爾後常に我北邊を騒がせ



### 第九課 亞米利加合衆國の獨立

英國は、初め大殖民地を有すると共に、其需要を必ず本國に仰がしめ、且つ其輸入は本國船に限り、アダム・スミス Adam Smith の自由貿易説出でてより、稍寛大となりしも、連年の戰爭の結果、歳入、軍資を償はざるに至り、ジョージ三世(二七六〇)のトリーニ内閣は一七六五年、スタンブ、アクト Stamp Act を發し、米國殖民地に課税せり。

スタンブ、アクト

北米殖民地の反抗

米國殖民地は其成立に於て、本國の保護獎勵を受けたることと少く、寧ろスチュアート家の虐政を避けて、自由を得んとしたるものなれば、初めより英國々民たる權利を主張せしが、今や其隆盛に赴くに及び、他の殖民地の如く、需要を拘束さ

れ、代議士を出さざるに、租税を課せらるべき理なきを論じ、殖民地各州の議會は、王及び國會に請願書を出し、ビッドも議會に於て其非を鳴らししかば、英政府はスタンブ、アクトを廢棄し、更に茶其他の貨物に、少許の税を課せしに、殖民愈激昂し、一七七〇年、ボストン Boston 殺戮の運動起り、一七七三年茶船狼籍の事件あり、形勢不穩なりしかば、英政府はボストン港を封鎖し、軍隊を以て之を威壓せんとせり。殖民地諸州は、一七七四年、フェラデルフア Philadelphia に大陸會議 Continental Congress を開き、本國との貿易を禁じ、本國政府に寛大の處置を哀願することを決せしが、マサチューセツ Massachusetts の人民、州會を開かんとするとき、英軍と衝突して、遂に戦端を開けり。

殖民地はジョージ・ワシントン George Washington を總督とし、使



ワシントン

北米合衆  
國獨立の  
宣言

獨立戰役  
の進行

節を歐洲諸國に遣はして援助を求めしに、當時自由平等説に心酔せる佛國人は、ラフ、エト Lafayette 以下來り援くるもの多く、一七七六年大陸議會は其獨立を宣言し、次で殖民地十三州は、長く亞米利加合衆國 United States of America の名の下に、結合すべきを決議せり。



King の佛國に來りて援を乞ふや、佛國政府は其國情をも顧みず、怨を英國に報いんとして、一七七八年、公然合衆國と同

北米合衆  
國の獨立

盟し、西國も之に加はり、魯の女帝カザリンは、英國が海軍の強大なるを恃みて、中立國の船舶に無禮を加へしを怒り、丁抹瑞典と武装中立同盟 Armed Neutrality を結び、次で墺普蘭・葡之に加盟するに及び、形勢一變し、一七八七年、ワシントンはラフ、エトと共に、ヨークタウン Yorktown を陥れ、英將を降ししかば、英軍の勢挫け、且つ内閣交迭して、小ピット Pitt the younger 首相となりしかば、一七八三年、ヴェルサイユ Versailles に和議を結び、英國は合衆國の獨立を認め、セネガルを佛に、ミノルカを西に譲りたり。

此に於に、ワシントンは總督を退き、各州自治に任せしが、一七八七年、フロリダフロアに各州の代議士を會し、新憲法を制定し、國體を共和政治とし、大統領を置き、任期を四年とし、再選を許し、二院の議會を組織して、立法の權を與へ、ワシント



ンを推して、大統領となせり。  
英國は合衆國の獨立となりて、一時打撃を受けたりしも、其盛大となりて、購買力を増しし爲め、却て其商業を盛にすることを得たり。

### 第十課 佛國大革命の發端

ルイ十四世の行ひたる、王權神授主義と、宮廷の華奢風流とは、第十八世紀に於ける、歐洲の風潮となり、此に伴ひて、一種の革新的文學を生じ、専ら貴族・僧侶等、中世の遺物たる特權者流の墮落不法を痛罵排撃することを勉め、自ら王權の擴張を容易ならしめ、佛のヴォルテール Voltaire (一六九四—一七七八) は、最も此説を鼓吹せり。然るに、歐洲各國が、其主義によりて中央集權を行ひ、王權を固定するに及び、革新文學は一轉して、君主權

十八世紀の風潮

革新文學

を攻撃するに至り、自由平等を唱ふる、民權説となり、佛のモンテスキュー Montesquieu (一六八九—一七七五) ルーソー Rousseau (一七一二—一七七八) 等、

最も極端なる民主説を唱導せり。

時に、ルイ十五世の長き治世は、朝廷の腐敗と、外國戦争との結果、國庫空乏、財政困難の極に達し、貴族僧侶は多く土地を有して、納税の義務なく、平民を使役する權あり、且つ賣官の制ありし爲め、高官は大抵其占むる處となれり。平民は此に反して土地を有せず、重税を課せられ、衣食にも窮する狀況に陥りしかば、革新文學の影響は、最も佛國に甚しく、人民皆秩序ある改良よりも、破壊的改革を必要と考ふるに至りしに、會、北米合衆國の獨立戰役起りしかば、人民狂奔して其跡に倣はんとし、遂に悲惨なる大革命を生ぜり。

一七七四年に王位に即きたる、ルイ十六世は、温厚の君子に

佛國宮廷及び貴族の腐敗

ルイ十六世



ステーツ、  
ゼネラル

ナシヨナル  
アッセン  
ブル  
ムブリ

して、人民を悲境より救はんとし、**チュルゴー Turgot**、**ネッカー Necker** の人才を擧げて、財政整理の任に當らしめしが、王は自信の力に乏しく、王后及び朝臣の反抗に遇ひて、改革を斷行することを得ず、**カローン Calonne** 出でて、財政の局に當るや、徒らに朝廷の華美を増して、財政の豊なるを裝ひ、新債を起さんとして、却て財政困難を増ししかば、一七八八年、**ネッカー** 再び出でて、久しく開かざりし、**ステーツ、ゼネラル States general** を召集し、財政の救済を諮らんとせり。

三民議會

一七八九年、**ステーツ、ゼネラル** の、**ヴェルサイエ** 王宮に會するや、貴族及び僧侶は、各部別室に議せんとし、平民は一室に會せんとして、紛議を生じ、遂に、平民の議員は、自ら相會して、**ナシヨナル、アッセンブル** **National Assembly** (一七八九年六月) を組織し、**ミラボー Mirabeau** 其牛耳を執り、憲法を制定せざる間は、決

バステル  
破壊

バステル民亂のノルマ



して解散せざるべきを盟ひ、貴族僧侶に入會を勸告せり。

此に於て、王后・朝臣等は、王に迫りて、**ネッカー** を退けしめ、武力を以つて、**ナシヨナル、アッセンブル** を解散せんとせしかば、**巴里** に暴動起り、暴民は、七月十四日、國事犯人を禁錮せる **バステル Bastille** の牢獄を破壊し、富豪の徒を殺戮し、騷亂、布いて各地方に及びしかば、貴



族等は争ひて國外に逃走せり。王は、倉皇、巴里に來り、輿論に従ふべきを公言せしが、一旦端を開ける革命運動は到底止むること能はず。

### 第十一課 革命の進行 波蘭の滅亡

改革

ナシナル、アッセルムブリーは、バスナル破壊の報を得るや、直ちに封建的特權を廢し、ミラポー等頻りに改革を斷行し、僧侶の特典を廢し、寺院の財産を沒收し、新憲法の編纂を勉め、行政權を縮小し、民選の裁判官、一院の立法議會、宗教の自由、度量衡の一定等を議決して、秩序を恢復せんとせしが、ラフ、エト等の空想家は、極端の改革主義を唱へ、一七九一年、ミラポーの歿するや、世論益過激に傾き、王は大に恐れ、巴里を逃れんとして捕へられ、アッセルムブリーは、王に迫りて新憲法を裁

可せしめ、自ら解散せり。

此に於てレヂスレーチーヴ、アッセルムブリー 立法會議 Legislative Assembly

(一七九一年一月)組織され、議員は、ラフ、エトの率ゐしフイラン

ト 立憲政、王黨 Feillant、ローランド Roland の率ゐるジロンド Girondists

和 温和兵黨 マラー Marat、ダントン Danton、ロベスピエール Robespierre

の率ゐるマウンテン 過激共和黨 Mountain の三派に分れて軋轢し、

マウンテン黨最も勢力あり。

普塊の干渉

歐洲諸國の君主は、革命派の舉動、益過激に走るを見て、君主主義に害ありとし、普王フレデリク、ウリアム二世、獨帝レオポルド二世と同盟し、佛國に兵を出せり。議員等國王に迫りて戰を宣せしめしが、始め佛軍敗績せしかば、王の敵と内通せるを疑ひ、暴民、王宮に亂入し、王を捕へて議會に幽し、立憲主義の人を虐殺せり。此時、同盟軍は波蘭問題に關し、露の野



心を恐れ、運動活潑ならざりしに乘じ、佛軍は、一七九二年九月、大に同盟軍をヴァルミー *Valmy* に破り、ライン、ネザール地方に侵入せり。

ナシコナ  
ル、コナ  
ン、コナ  
ン

レヂスレーチャーヴ、アッセムブリーは乃ち解散して、ナシコナル、  
コナウエシオン *National Convelion* (一七九二年九月) 成立し、議員は悉く過激なるジロンド及びマウンテン黨より成り、開會の翌日、王政を顛覆し、共和政治を立て、次で王を審判して有罪と決し、翌年一月斷頭機 *Guillotine* 下に之を弑せり。

佛國共和  
政治

英相ピットは、佛王の遭難を聞き、普、墾、露、西、蘭等殆ど全歐の帝王同盟 *Coalition* を作りて、佛の共和政を非認し、ルイ十七世を王とすべきことを宣言し、兵を出して佛の四境に迫れり。佛國內にては、王黨西部に起りて之に應ぜしかば、コナウエシオンは保安委員 *Committee of Public Safety* を設けて、難局に當らし

第一回帝  
王同盟

保安委員

めしに、委員等互に軋轢し、ダントン、ロベスピエール等は、兵力によりジロンド黨を制して、實權を握り、全國の壯丁三十萬を募り、兵器彈藥を民間に徵發し、普、墾、露の兵を破りしが、國內に於ては、激烈なる手段によりて、反抗者を殺戮し、全く紊亂せる秩序を回復せんとし、所謂威嚇政治 *Reign of Terror* (一七九三年六月) を現出せり。

波蘭の滅亡

此より先き、波蘭の志士は、第一分割の恥辱を雪がんとし、一七九一年新憲法を制定し、諸般の改革を行はんとせしが、露帝カザリン二世は、普、佛二國の露と戰へるに乘じ、露國黨の貴族を煽動し、新憲法に反抗せしめて、兵を出ししが、普國は露の獨占を恐れて之と同盟し、一七九三年、第二回の分割を行へり。此に於て志士等益憤慨し、ワルソー *Warsaw* に義旗を擧げて、恢復を計りしが、内には、貴族と農民と軋轢し、外には



普・奧・露の兵大に至りしかば、ワルソー遂に陥り、一七九五年、三國間に、第三回の分割行され、波蘭は全く滅亡せり。

### 第十二課 佛國威嚇政事 ナポレオンの出世

威嚇政治

佛國は、外には、同盟軍の益、國境に迫るあり、内には、ジロンド黨の殘黨、地方に逃れて、人民を煽動し、マラーは一少女の爲に刺殺され、形勢益、不穩なりしかば、保安委員は、革命裁判所を開きて、王后を弑し、多數の志士及び無辜の人民を虐殺して、又反抗の氣力なからしめ、基督教を廢し、道理自由を神とし、曆法紀元を改め、以て國民の耳目を新にせんとせしが、空想に走れる委員は、互に相疑ひて殺戮するに至り、ロベスピエールは、先づダントン等を倒し、其理想とせる新社會を設立せんとせしが、コンヴェンションの議員は、禍の及ぼんことを

チレクトリ

佛軍の勝利

恐れ一七九四年、七月ロベスピエール等を捕へて之を殺し、新神崇拜を停止し、革命裁判所保安委員等を廢し、中等人民の援助により、溫和主義を執り、威嚇政治漸く終を告げたり、此時、保守的の反動大に起りしも、砲兵士官ナポレオン、ボナパルト Napoleon Bonaparte 兵力を以て之を鎮壓し、コンヴェンションは、一七九五年、新憲法を定め、<sup>監督官</sup>チレクター Director 五人を置き、五年を任期として、之に行政權を委ね、上下二院の議會を置き、きて、立法の任に當らしめて解散せり。此に於て、佛國の革命、漸く終末に近づき、此より武斷主義の<sup>監督政治</sup>チレクトリ Director <sup>マ</sup>（一七九五年十一月）となる。

此より先き、佛軍はよく外敵を破り、北はライン左岸を略し、和蘭を威壓して、バタヴィア共和國 Batavian Republic を建て、南はアルプス、ピレニース地方を占領せしかば、普・西は、佛の共



ナポレオンの埃伊征討

和政を承認して、和を結ぶに至れり。此に於て、佛の新政府は、盛に攻勢を取り、諸將をして、埃伊に向はしむ。

一、七九六年、ナポレオン、伊太利に入り、連戦みな勝ち、サルチニア王をして和を請はしめ、ロムバルデーより埃兵を驅逐して、悉く北部伊太利を占領し、西と同盟して、英に當らしめ、一七九七年、埃に入りて、ヴェナに迫りしかば、獨帝フランシス二世、遂に和を請ひ、カムボ、フォルミオ Campo Formio の條約により、埃はヴェニスを得て、ネザールランドの佛領たるを認めしかば、佛政府は、ロムバルデーにシサルピネ Cisalpine 共和國を建て、ゼネヴ、をリグリア Liguria 共和國とし、次で法王を虜にして、羅馬共和國を作り、瑞西をヘルヴチア Helvetia 共和國となし、共に佛の監督保護の下に置きけり。

ナポレオンは、また英國と印度との連絡を絶たんとし、政府

埃及遠征

第二回帝王同盟

コンサル政治

リニエール條約

に請ひて埃及を征し、一七九八年、悉く之を征服したりしが、其海軍は英將ネルソンの爲にアプーキル Abokir に於て破られしかば、ナポレオンはシリアを経て歸らんとし、エーケル Acre 攻撃に挫折して、復た埃及に歸れり。

此に於て、英は、また露埃葡と、第二回の帝王同盟を結び、連りに佛軍を破り、佛國政府内、亦一致せずして、形勢頗る危かりしかば、ナポレオンは、急行、國に歸り、一七九九年、兵力を以て、チレクトリ政府を顛覆し、新憲法を定めて、自ら十年期の、<sup>最高統領</sup> First Consul となり、獨り實權を握れり。

ナポレオンは先づ露帝ポール一世(一七九六—一八〇一)に説きて同盟を脱せしめ、一八〇〇年、自らアルプス山嶺を越えて、伊太利に入り、大に埃軍を破る。ラインに向ひしモロー Moreau も、亦大に捷ちしかば、一八〇一年、埃は佛にライン左岸の地を譲り



てリ、ノーネヴル Luneville の和を結べり。  
此間、英相ピットは佛、西及び和蘭の殖民地を略し、他國の船舶を掠せしかば、露は瑞典、丁抹と結びて武装中立を再興せんとせしが、一八〇一年、アレクサンダー一世(一八〇一)立ちて其計畫を中止し、英國も連年の戦役に陥り、財政困難に陥り、ピット内閣倒れ、國論平和に傾きしか

ナポレオン一世の像



アミエンス條約

ば一八〇二年、アミエンス Amiens の條約により、英はセイロン及びトリニダード Trinidad の外、悉く其侵地を還して和を

ナポレオンの内治

結べり。

ナポレオンは、また財政を整理し、人才を登用し、ナポレオン法典を編纂し、教育を奨励し、商工業を保護し、建築土工を興して、大に秩序を回復せしかば、革命の慘禍に懲りたる國民は、皆之を徳とし、一八〇二年、ナポレオンを、修身のコンサルに選舉し、一八〇四年、ナポレオンは、遂に佛國皇帝の位に即き、ナポレオン一世と稱し、翌年伊太利王を兼ねたり。

アミエンス條約

### 第十三課 ナポレオン一世の霸業

英國は此より先き、また佛と戦を開きしが、ピットの再び相となるや、佛國の帝政を認可せず、墮露及び瑞典と、第三回の帝王同盟を結びたり。ナポレオンは西國と同盟し、又獨逸中部の諸州を誘ひて、同盟軍に當らしめ、自ら英國を征せんとせ

第三回帝王同盟



トラファ  
ルガー海  
戦

しに、其海軍機を失ひ、一八〇五年、西佛の聯合艦隊、英將ネルソンの爲に、トラファルガー *Trafalgar* に粉碎され、此より佛の海軍振はず、ナポレオンが征英の企圖、畫餅に歸せり。然れども、ナポレオンは急行して、奥露の連合軍をアウステルリッツ *Austerlitz* に破り、翌年、プレスブル *Presburg* 條約により、奥より、ヴェニス地方を得たり。

神聖羅馬  
帝國の解  
散

一八〇六年、ナポレオンはネーデルスを取り、兄ジョセフを其王とし、バタヴィア共和國を和蘭王國とし、弟ルイを其王とし、ライン地方の獨逸諸邦をして、ライン同盟を作らしめ、自ら其保護者となれり。此に於て、獨逸の統一、全く破壊され、獨逸フランスス二世は、神聖羅馬帝國の解散を布告し、自ら奥帝フランスス一世と稱せり。普魯西は、一七九五年、佛國と和してより、戦亂を傍觀し、専ら

普魯西の  
繁榮

伯林條例

大陸制度

テルシ  
ト條約

力を内治の改良、文學、科學の獎勵に致し、哲學にはカント *Kant*、*Wolff* を、歴史にはニブール *Niburu* を、言語學にはウォルフ *Wolff* を、詩文にはシルレル *Schiller*、ゲーテ *Goethe* を出し、大に國民の性格を高め、富強を致ししが、ナポレオンの無禮を怒り、一八〇六年、露の後援を恃みて、戦を挑みしが、ナポレオン直ちに進みて之を破り、伯林を陥れ、伯林條例 *Berlin Decree* を發して、大陸諸國の港灣に、英國船舶の入るを禁じ、所謂大陸制度 *Continental System* を以て、英國を苦めんとし、更に進みて、普魯の同盟軍を破り、一八〇七年、タルシト *Tilsit* に和を講じ、普領ポーランドを奪ひて、ワルソー公國とし、之をサクソンニアに與へ、エルベ河西をウエストファリア王國とし、弟ゼロームを其王とし、普露兩國をして大陸制度に加盟せしむ、翌年、丁抹に迫り、又之を諾せしむ。



普國の反

ナポレオンは勢に乘じ、一八〇八年、葡萄牙に迫り、其王を巴西に逐ひ、又た西王を廢して、ネーブルス王ジセフを其王とし、妹婿ミラー Muller をネーブルス王とし、次で法王が大陸制度に反對せるを以て、其地を收め、法王を虜にせり。然るに、歐洲諸國は漸くナポレオンの威壓に堪へず、普王フレデリック、ウリアム三世は、スタイン Stein を相とし、行政を改め、財政を整理し、市府に自治制を許ししに、ナポレオンは一八〇八年、普王に迫り、スタインを退けしめ、常備軍を制限し、償金の額を増せり。普は尙ほ、一八一〇年、ハルデンベルグ Hardenberg 相となり、商工を奨励し、柏林大學を創設し、フヒテハイ Fichte シュライエルマヘル Schliermacher フムボルト Humboldt 等は愛國的論文を出して、人心を鼓舞し、時の到るを待てり。西人は、一八〇九年、所在、兵を擧げて、新王ジセフを逐ひ、英軍

西人の叛

埃國の反

ナポレオン全盛

は葡國に上陸して之を助け、ナポレオン急行其亂を鎮め、ジセフを位に復せしが、西人の反抗は尙ほ止まず。埃國は、西國の騷擾に乘じ、私に英國と通じて、一八〇九年、兵を擧げしが、ナポレオン又た埃に入り、ワグラム Wagram に其軍を破り、ヴェナに和議を結び、埃をして地を割き、且つ大陸制度に入らしめたり。翌年、ナポレオンは、皇后ジセフ、Josephine を離婚し、埃帝の女マリア、ルイザ Maria Louisa を娶り、次で和蘭を直轄とし、瑞典を大陸制度に入らしめ、以て英國の貧弱を待たんとせり。此れ實に、ナポレオン全盛の時期にして、殆ど全歐は、其覇權の下に屈服せり。

第十四課 歐洲獨立戰役 ヲ、エナ會議



露國征討

大陸制度は英國を苦めしのみならず併せて歐洲諸國に不利なりしかば、諸國は漸く之を脱せんとし、特に露は佛の強大を忌み、先づ英國船の入港を許ししかば、ナポレオンは一八一二年、大軍を率ゐて之を討じ、直ちにモスコイに入りしに、露人自ら之に火を放ち全都灰燼に歸せしかば、佛軍は大に飢寒に苦み、また露軍の掩撃に遇ひて死傷算なく、ナポレオンは僅に身を以て逃れ巴里に歸れり。

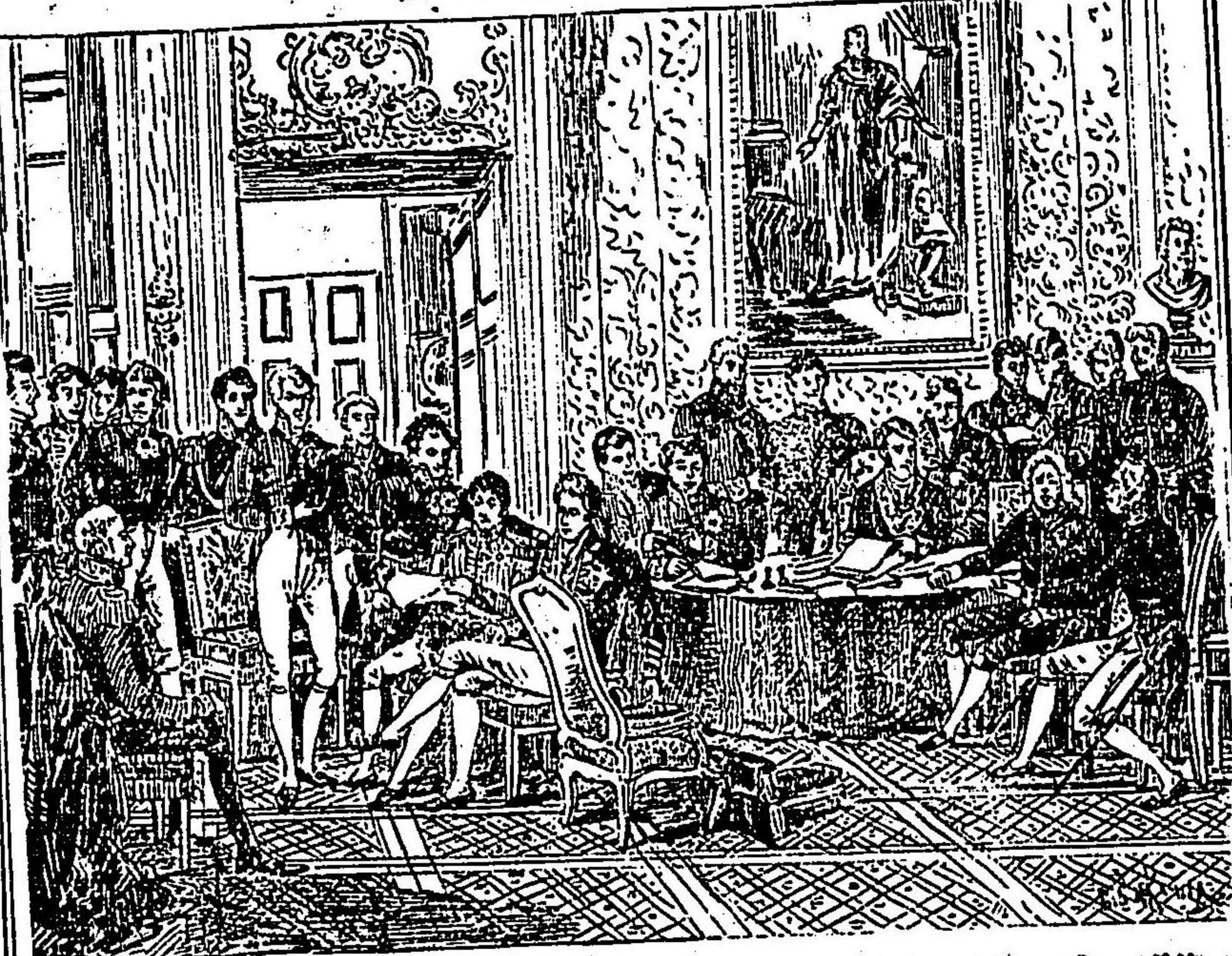
ライプチヒの戰

此に於て、諸國争ひ起りてナポレオンに抗し、一八一三年、英・露・普・墺の連合軍は、ライプチヒに於て、大にナポレオンの軍を破りしかば、西軍は、英將ウヰリントン Wellington の援を得て、佛の國境に迫り、蘭民も一揆を起して、佛の官吏を逐ひ、翌年、連合軍は巴里を圍みて之を陥れ、ナポレオンを廢して、エルバ島に竄し、ルイ十八世(一八一四)を佛王とし、ヴェナに列國會

ヴェイナ會議

ウオタータの戰

ヴェイナ會議の圖



議を開きて、亂後の處分を議せしが、各國、自利を計りて議論百出し、不穩の形勢を呈せり。

ナポレオン此報を聞き、一八一五年、密に佛國に歸り、將卒等の歡迎を得て、また帝位に即きしかば、列國大に驚き、英將ウヰリントン、普將ブリーヘー Blücher を總督とし、ナポレオンの軍とウオタータ Waterloo に激戰



ウイ  
エナ  
條約

して之を破り、ルイを位に復し、ナポレオンをセント、ヘレナ  
St. Helena 島に流謫せり。  
列國再びウイエナに會し、西班牙及び伊太利諸國は、之を舊君  
主に還し、瑞典に丁抹領なる諾威を與へ、和蘭に塊領ネザー  
ランドを併せて王國とし、瑞西と共に中立國となし、英は新  
附の殖民地を領有し、露は波蘭の大部、普はサクソニーの大  
部を得、塊はミラン、ヴェニスを復し、獨逸諸邦は連絡乏しき聯  
邦組織となり、以て大亂の局を結べり。

### 第四篇 近世史

#### 第一課 神聖同盟

神聖同盟  
成る

メッ  
テル  
ニヒ  
の  
壓  
制

ウイエナ會議の際、露帝アレクサンダー一世は、塊帝フランシ  
ス一世、普王フレデリック、ウリアム三世に諮り、神聖同盟 Holy  
Alliance を結び、内治外交共に基督教の博愛自由平和主義に  
依らんことを誓ひ、各國君主を誘ひて之に加盟せしめたり。  
然るに、塊相メッテルニヒ Metternich は、同盟を利用して塊國の  
覇權を確めんことを期し、諸國の自由運動を抑壓することに  
熱衷せり。  
獨逸の諸邦は、薄弱なる聯合のもとにありて、憲法の制定も  
期し難かりしかば、佛國の民主主義に感化されたる大學生  
等は、種々の會合を設けて、獨逸の自由統一の必要を論じ、一  
八一七年、ルーテルの三百年祭を行ふに當り、改革的示威運